
セルフ・ライト・イデオロギー ——魔人転生記——

葵 大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セルフ・ライト・イデオロギー——魔人転生記——

【Nコード】

N2571Z

【作者名】

葵 大和

【あらすじ】

始まりは唐突に。何の脈絡もなく導かれた異世界で、青年は連続死亡記録を大幅に更新した。剣で斬りつけられ、光線で打ち抜かれ、拳に貫かれ。ようやく理不尽な死を免れた彼を拾い上げたのは魔人族と畏怖される種族の女性で——

異世界転生モノです。割と勢いで書いているのでご都合主義万歳要素を含む事があります。時間潰しにでもお使いください。

1話 「輪廻」

突然だけど、死亡フラグってあるだろ？

代表的な物を上げると「ここは俺に任せて先に行け！ 後で必ず追いつく！」とか、「俺、この戦が終わったら結婚するんだ……」とかの事だよ。他にも色々類型はあるだろうけど、得てして似たような台詞だよな。

でもさ、俺思っんだ。

一番可哀想なのって死亡フラグすら立てられないまま突如として死ぬ奴だよな。

いつものようにベッドに入り、明日も楽しい日になるといいなあ、なんて楽観的な考えを巡らせながら目を閉じた所まではなんとなく覚えていたんだ――

次に目が覚めたら鬼のような形相をした鎧甲冑の男に斬り掛かられてました。

「この世から消えてなくなれ！ バケモノめ！」

凄まじい気迫です。でも正直訳が解らないのであんまり怖くありません。とても不思議です。眼の前の鎧甲冑のお方の剣がもう肩にめり込んでいてそろそろ心臓まで達しそうです。他人事みたいに「ああ、俺ここで死ぬんだな」とか考えながら、どうせなら盛大に果ててやるうなどという意味不明な衝動が湧きおこってきたのでとり

あえず叫びました。

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

——と。

お次に目が覚めた時にはなにやら目の前に青白い光線が迫っていました。

「お前さえいなければ！ 消えてなくなれ！ 化物！」

ちよつと遠くに息も絶え絶えに叫ぶ軽装の男が見えました。そろそろ眼の前の光線が身体に衝突しそうです。さっきも言った通り訳が解らないのであんまり恐怖はありません。「ああ、俺ここで死ぬんだな」と他人事のように——

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオオ！」

——とりあえず叫びました。

お次に目が覚めた時にはなにやら目の前に拳が迫っていました。

「お前は私が倒す！！塵となれ！ ば——」

「ふっざけんなああああああああああ！！ ゴフウ！！」

台詞を変えてみたけど駄目でした。めり込んでます、拳。もうそ

りやあ痛いです。たぶん腹部を突き抜けてます。まだ前の二つは良かった…一度目は心臓両断で即死、二度目は訳も解らないまま光に覆われて即死、でもこの三度目は頂けない。かなり痛い。

徐々に痛みが消えてきて妙に頭が澄んできた。いい加減腹が立つてきた。立つ腹がすっぽり拳大に抜け落ちてるんですけどね、現状。嗚呼、勝手に瞼が下りてきたよ。

次目覚めた時にはまた死ぬ一歩手前なのだろうか。

目が覚めました。正直何回目かも解りません。いちいち死ぬ様子を説明するのも無駄に思えてきた。

「嫌だあああああああああ！！」

とりあえず叫びました。もう半ばやけくそです。これまでに一体何回死んだと思ってるんだ。

「■■■■！」

しかし、どうやら今回は様子が違ったようです。

え？ もう死ななくてもいいの？

ひとえにその事だけが嬉しくて、現状を何も理解出来ぬまま、溢れ出る感動に身を任せた。

「うつ、うぐつ、うえつ」

我ながら、無様な泣き姿だと思う。きつと顔は泪と鼻水でぐちゃぐちゃになっているのだろう。

「■■■■？」

ひとしきり泣いた後、自分が置かれている状況を確認しようと首をもたげた。なんかすっごい動きづらいけど今は気にしないでおう。

ふと視線を周りに巡らせると、人の顔が映った。

「■■■、■■■■……」

異様に血色の悪い青白い肌と、不気味な赤の瞳をした何者かが、口を開いて、何か言葉を紡いでいる。漠然と何か喋っているとだけ解る。男とも女とも見分けのつかない中性的な顔。青白い肌と真っ黒で艶やかな髪が強いコントラストを発している。

丸身を帯びた身体の線や、女性特有の凹凸が見えたので、とりあえず『彼女』と代名する事にした。

全く聞きとれないが、とりあえずこちらから何かアクションを起こしてみよう。そう思って再び俺は口を開いた。

「あうあうあー？」

……ん？

落ち着け、もう一度だ。

「あぶ？ あうあー？」

……。

そこから自分の置かれた状況を知るのは早かった。

なんともなく嫌な予感がして、咄嗟に腕を振り上げて自分の顔の前に持つてくる。腕が重い。

そして、自分の手を見て理解してしまった。
その手は赤子のように小さく、弱弱しかった。握れば潰れてしま
いそうな小さな手。

意志の命令とズレた反応を示す声帯、口。

「■■■？」

傍らでこちらを見ながら言葉を紡ぎ続けている彼女が心配そうな
表情を浮かべた。

なんとか返事をしたい所だが――

「オギヤア」

気持ち悪い言葉が出ました。次こそは――

「オウギヤア？」

もうしません。もっと気持ち悪くなったよ！

もう喋るものか。さっきは喋れたのに…… 最初の叫びは一度き
りの奇跡だったのか…… どうせならもっと有意義に使うべきだっ
た！ 今更遅いよね！

必死で心の中で明るく声を奮わせるが、しばしおいて、何とも言
えない虚無感に襲われた。

赤子、そう、赤子。俺の軀は赤子そのものだった。

そんなことを考えていると、ふいに体を浮遊感が襲ってきた。視
界が揺れる。

さっきまで傍らでこちらを見ていた彼女が、俺を抱き上げていた。
どこに連れて行かれるのだろうか。

でも、とりあえずは――

死ななくて良いなら今はなんでもいいや。

一周して樂觀的になる。この時ばかりは自分の精神力を称えてやりたくなった。

時間がたつごとに理性は落ち着きを取り戻していく。

考える、思考する、といった力が失われていない。赤子の身体と熟成された精神の差異に戸惑うが、かくあるモノなのだからとやかく言っても仕方あるまい。深く考えて無限思考のどツボにはまるよりは幾分マシだろう。解らないものは解らない。開き直れ、俺。

彼女の腕に揺られて数十分。目に入る景色は鬱蒼とした木々ばかり。暗い。じめじめしてる。

それからさらに数十分して、ようやく視界に真新しい景色が入ってきた。

荘厳な城である。白地の壁は少し汚れていて、真っ先に古風な印象を受けた。それでも、所々で光沢のある鉱石が列を為しつつ、不思議な象形を象っていて。天から降り注ぐ光を反射して澄んだ輝きを見せているのが綺麗だった。鋭角的な構造で、例えるならまるで針の城だ。長短様々な凸型の建物が密集しているようにも見える。城が醸し出す奇妙な雰囲気、ちよつと胸が高鳴った。

彼女が何か言ってきた。ごめんね…… 全く何言ってるか解らないよ……

でも、その優しい声色だけでもありがたい。これまでひたすらに罵倒されては殺されて、悪意をぶつけられては殺されて。そんな輪廻を巡ってきたから、もはや彼女の心配そうな表情だけで満腹です。

そんな事を考えていると、今度は抗う事すら躊躇われるレベルの眠気に襲われた。微妙に揺られるのも相まって、わずか数秒で意志とは関係なく瞼が下りてくる。

——正直な所、睡眠というものが恐ろしかった。

自分の身体が赤子であることを知っているから、睡眠が必要なのだろうと納得はできるが、何分ほんの少し前までは意識が途切れては目覚め、殺され、目覚め、殺されの繰り返しだったのだ。今意識を途切れさせてしまえば、次に目覚めた時にはまた理不尽な死と直面しているのではないか。

嗚呼、でも無理、これには逆らえない。生理現象万歳。

最後の足掻きと腹を括って、意識の途切れる間際、口には出さず、心の中で呟いた。

もうどうにでもなれ——

次に目が覚めた時、真っ先に周囲を確認した。
結論から言えば、俺は巨大なベッドに寝かされていた。分相応にも程がある。

——でかすぎだろおい……

すると、視界の端から、ぬっ、と眠りに落ちる前に見ていた彼女の顔が現れた。

片手には分厚い本。俺が起きたことを確認すると、ぱらぱらとそれをめくり始めた。

「ア……ナタ……は、だ……れですか？」

なんと！ 知ってる言葉だ！ あの分厚い本は翻訳書か何かかな？ ……でもね、それを訊ねたところで俺に言葉を返す能力はないんだよ…… ちょっと頭の緩い人なのかな？ 馬鹿、やめろ、せつかく必死で話しかけてくれたんだぞ。

自分を戒める。とはいえ、言葉を返せないというのは紛れもない事実で、どうしようかと考えていると、再び彼女が言葉を紡いだ。

「……ごめ……んなさ……い。すこし……で……ことば……わかる、くる」

彼女が眉間に皺を寄せながら必死に手元の本に目を走らせ、再び声を発した。

片言だが、恐らく俺が理解出来る言語を使える誰かが来てくれるのだろっ、とは理解できた。運が向いてきた。これで一方通行的にはあるが情報を得られる。

嬉しくなって身体に力を漲らせ、転げまわって見せた。

彼女は俺がベッドの上を高速で転げまわる様を見て、嬉しそうに微笑んでいた。中性的な美貌に優しい微笑。血色の見られない真っ白な肌も、汚れないキャンパスのように見えて、つい見惚れてしまう。

とにかく、彼女の言う人物を待つことにしよう。それまでにある

程度身体を制御できるように努めて、言葉ではなく動きで反応を示せるように練習しよう。うん、それがいい。

彼女のいう人物はそれからほどなくして俺の視界に現れた。彼女と同じような――異様に真っ白な肌と、真っ赤な眼。その人物は一見して男だと解った。控えめとはいえ、力強く隆起する筋肉群がことさらに男であることを主張してくる。

「初めまして。気分はどうだい？」

言葉づかいは丁寧だった。

俺はその短い言葉を受けて、ベッドの上で右に一回転した。フフ、これがこの短時間で俺が得た能力の一つ。右に一回転で肯定！左に一回転で否定！完璧！……なわけねえだろおおおお！これくらいしか思いつかなかったんだよ！頼む！なんとかこっちの意志を汲み取ってくれ！利発そうなお兄さん！

「うん？ ああ、君は喋れないのか。どうも赤子と関わり慣れていないから失念してしまったよ」

もう一回右に一回転。

「右に回転すると肯定……かな？」

マジパネエ。このお兄さんマジパネエ。天才と称しても良い。察しが良いとかそういう次元を軽く二秒で超えてった。よし、ここで右にもう一回転すれば完璧だ。

「はは、やっぱりそうか。解ったよ。それにしても、意志は明確なのに喋れないっていうのはもどかしいね。赤子ってみんなそうなのかな？」

いやいや、それは無いと思うよ……

「まずは自己紹介から。僕の名前は《アルフレッド・サターナ》。そして君を拾ってきた彼女は《リリアン・サターナ》、僕の妹だ。彼女の話だと、君は僕達が居住しているこの城の近くに落ちていたらしい。 ■ ■ ■、 ■ ■ ■？」
「 ■ ■ ■。 ■ ■ ■ ■ ■」

アルフレッドは別の言語でリリアンと喋った。

それにしても、落ちていたとはどういう見なのか。

あともう一つ、名前で気付いた。

俺は俺の名前が解らない。

あつたような気もする。何度も何度も殺される段階で、記憶が壊れてしまったのか。思い出そうとすればするほど、記憶の空白は明確になっていった。確かに前はここではないどこかで暮らしていたはずなのに、そんな気がするのに、それすらも思い出せない。取るに足らない情報と、何度も死んだ時の状況だけが微かに残っていて。

「——それで、放っておくのも忍びないからリリアンが連れて来たらしい」

名前、なんだっけなあ。

だめだ、絶対に思い出せない気がする。忘れているとか、思い出せないだけって感じじゃない。

無い。

「辛そうだけど大丈夫？——安心して。僕達は君を捨てたりしないから。連れて来たからには君が成長するのを助けよう」

ありがたい。人の良心つてのに久々に触れた気がする。

「さしあたって、とりあえずは君が僕達と十分に話せるよう、僕が言葉を教えよう。食べ物も与える。さあ、疲れただろう。君は安心して眠るといいよ」

アルフレッドが柔和な微笑みを見せた。

その微笑みにつられるように、俺は一度だけ顔をしわくちやにしながら笑って。再び瞼を閉じた。

いつかのベッドの中で呟いていたように、それでも、今度ばかりは心から——

明日は楽しい日になるといいなあ——

2話 「殲眼」

リリアンに拾い上げられてから一週間が過ぎました。

怒涛の一週間だった…… 唯一俺が理解出来る言語を話せるアルフレッドはなにやら忙しいようで、忙しない中度々俺が寝ているベッドへ顔を出してはくれるが、大体はリリアンが俺の世話をしてくれていた。

怒涛の一週間だったと感じるのはそのリリアンのせいでもある。

「■ ■ ……？」

「うつ …… うえ …… えぐつ ……」

俺は今、猛烈に悲しんでいる。溢れ出る感情をせき止める事が出来ず、本気で涙している。何故かって？

「■ ■ ■ ……」

リリアンが両手に血の滴る新鮮な『生肉』を持って、俺に差し出してくるからだ。おい！ やめろ！ そんなん食えるか！ 助けてアルフレッドお兄さん！

ぬるつとした感触が口元を覆う。一向にその赤い物体を喰わない俺に対し、リリアンは無理やり喰わせようという魂胆らしい。心配してくれるのは嬉しいけどさすがにそれは食えないよ……

「……………」

その美貌で可愛らしく首を傾げて見せても俺は喰わないからな。消化に悪いだろ。ていうか一通り火を通して殺菌とかしてくれ。俺赤子だよ？ 脆弱さ半端ないよ？ —— やっぱリリアンってオツ

ムが緩い方なのかな……

ようやく生肉を喰わせる事を諦めてくれたようで、リリアンはいそいそとベッドの横の椅子に座り込み、自分でその生肉を食い始めた。目元に雫が浮かんでいるように見えるが気のせいかな。ちよつと泣きながら生肉頬張るとか絵的にシユールだから。

彼女はあまり感情を表に出さない女性だった。もちろん、心配しているように見えたり、軽く微笑を浮かべたりはするけど、その変化量はアルフレッドに比べるとごく微細。一週間毎日彼女の顔を近くで見ていたから解るけど、これは鉄面皮と称される類だろう。

生肉を頬張るリリアンから視線を外し、見慣れた天井を凝視するよう努める。

すると、そこで部屋の扉ががちゃりと開いた。

来たか！ 我が救世主！

「ははは、またリリアンは生肉を食べさせようとしていたのか」

笑い事じゃないですよ、アルフレッド兄さん。

「ちゃんと赤子でも食べられそうなものを持ってきたよ」

そういつてアルフレッド兄さんは手の中からいくつかの小さな木の実を取りだして見せてくれた。木の実とはいったけど、どうにもその姿は毒々しい。紫とか黒とか……

「大丈夫。ちゃんと毒は抜いてあるから」

毒？ 毒って言いました？ それ毒が入ってたってことですよね？ ……いやあ、今あんまりお腹減ってないんですよー。それはあとで食べます。後で。うん。

俺はいつも以上に必死になって左に三回転した。鬼気迫る勢いで否定の意を送る。

「そう？　じゃあ、あとでリリアンに渡しておくよ」

やめろおおおお！　それは死亡フラグだあああ！　無理やり喰わせられるに違いない。いや、確実に喰わせられる。……予言者になった気分だ。

なんて心の中で恰好よくポーズを決めていると、アルフレッドが続けて言葉を紡いだ。

「今日は僕達の家族を紹介しておこうと思ってね。きつと君の役に立つ」

家族？

ふいの言葉に疑問符を浮かべるが、すぐにアルフレッドの言葉が形となって目の前に現れた。

部屋の外からがやがやと騒がしい複数の声が聞こえてくる。

そして――

「■■■■！」

「■■■！」

「■■■、■■■■■■？」

うわぁ……　なんかいつぱい部屋に入ってきた。皆が皆、アルフレッドやリリアンと同じような肌の色をしていて、赤い瞳を輝かせている。

「騒がしくて悪いね。でも、皆君みたいな赤子が珍しくて一目見ようと集まってきたんだ」

そういえば、前から引つかかる単語がある。
珍しい。正確には赤子が珍しい。

「実は僕達、赤子ってほとんど見た事がないんだ。僕達の種族は繁殖力が凄く弱いから。滅多に赤子が生まれない。その代わり、すごく長命だけだね。最後に赤子が生まれたのはいつだったかなあ――」

「――」
よしよし。知らない言葉の羅列がたくさんだぜ。

……んえ？

「だから、普通なら僕達と同じ種族の赤子がいれば誰の子だかすぐ解る筈なんだけど。一大事だからね。でも、どうにも君は僕達の誰かから生まれた訳じゃないらしい。皆知らないって」

あらまあ。それは不思議な事態ですね。

割と他人事のように心の中で頷いてしまったが、それ、俺の事だよね。

「君は僕達『魔人族』^{イノ・エイラ}と瓜二つだ。性質的にもよく似通っている。でも、君がどこから来たのかはわからない」

アルフレッドが苦笑した。

俺は今すぐに鏡を貸して貰いたい気分になった。そういえば、自分がどんな姿をしているか気にした事がなかったな。

「でもね、僕達と同じ種族なら、たとえ知らない赤子でも僕達の家族だ。誰から生まれたかはこの際たいした問題じゃない。他の家族達も、早く君と話したいって言ってるよ」

アルフレッドの横から十数人の魔人族（？）の方が興味しんしんといった体でこちらを見てくる。

俺は若干面喰らったが、アルフレッドのいうことも尤もだと思つて言語習得に意欲を燃やした。

その後、アルフレッドが他の魔人族を帰し、俺が寝ているベッドの隣に椅子を持ってきて座りこんだ。

「難しい話は君がもう少し大きくなってから話すよ。それまでは僕達を守ってあげるから、安心して育ってね」

さすがアルフレッド。その美貌と慈愛に満ちた表情でそう言われると虜にされそうだ。

そうまで言ってくれるなら、俺も安心して育って見せよう。フハハ、まずは睡眠からだ！

あつ、でも生肉は勘弁してね……

一カ月が過ぎました。意外と月日が流れるのって遅い気がする。寝ては起きて飯食ってまた寝て。時々生肉押し付けられては拒み、リリアンの顔も随分と見慣れて来た頃、ついに俺は自分の力で歩く事ができるようになっていた。

自分でもこんな速度で育つとは思わなかった。四足歩行から二足歩行へ三日で移行した時は自分の天才っぷりに心底慄いた程だ。

あと言葉の方も、アルフレッドの超翻訳機能のおかげもあって、大体習得した。第一、アルフレッド以外の魔人族は皆リリアンと同じ言葉で話していたし、俺も多大な好奇心を抱いて彼らの言葉を聞いていたので吸収は早かった。

時折足取りがおぼつかなくなる事はあれど、今やこのやけに荘厳な城の中を自由に歩けるだけの歩行技術はある。

「《サレ》、肉食べる？」

「全力で遠慮します……」

ああ、やっぱりリリアンってこんなこと言ってたんだなあ。悲しくもあり、嬉しくもある。俺の予想大的中。

サレというのは俺の名前で、魔人族の皆が考えてくれた。姓はアルフレッド、リリアンと同じサターナ。ないと不便だから、と言ってつけてくれた。

「火を通せばいいのに」

「こっちのがおいしい」

——変わった趣向の持ち主だ。

ベッドから飛び降りて、部屋に設置されている姿鏡を見る。

アルフレッドの言うとおり、俺の姿は彼らと酷似していた。真っ白なアルビノ肌。鮮血のように真っ赤な瞳と、夜よりも深い黒の髪。明暗がくっきりしていてやけに色が映える。

魔人族特有の中性的な顔つきで、肌の色や眼の色、髪の色も相まってやけに超俗的に映った。

「ちょっとアルフレッドの所に行ってくるよ、リリアン」

「ん、行つてらっしゃい」

生肉を頬張るリリアンに一言声を掛け、俺は部屋の扉の取っ手に手を掛けた。

言語を覚えた所で、アルフレッドから話があるらしい。

彼の部屋はこの広大な城の上層部にある。階段を昇るのが辛い、ここは訓練だと思って頑張ろう。

俺がアルフレッドの部屋に何とか到達し、その扉を開けると、中でアルフレッドが本を読んでいた。こちらに気付いて優しくな笑みを見せてくる。

「やあ、サレ。もうここまでちゃんと歩けるようになったね」

「まだ辛いけどね」

「すごい成長速度だよ。さあ、座ってくれ」

壁一面に長大な本棚が敷き詰められている部屋。その一角にある円卓を指さして、アルフレッドが言った。

「さて、何から話したものかな……」

「俺から訊ねても良い？ その方が連鎖的に話が繋がりそうだし」

「そうだね、そうしよう」

「じゃあまず最初に——」

俺は頭の中に所狭しと蓄積させていた疑問を口にしていった。

「ここはどこ？」

イーノ・エイライルドゥーエ

「魔族の国。今は国というより集落だけだね」

「集落？」

「魔族の数がある時を境に激減してしまったんだ。昔はもつとたくさん家族がいた。今はこの城にいる百名程がイルドゥーエの民だ。国と呼ぶには至らないかもしれない。主権も無いに等しいからね。この城——サンクトウス城はイルドゥーエがまだ名立たる国

だったころの名残で、魔人族はここに居住している」

「激滅した理由は？」

「ウィラ・ミトス純人族の一国家に攻め入られて殺されたんだ」

心臓が浮き上がる様な感覚を、俺は感じていた。

疑問ばかりが浮かぶ。

「なんで攻め入られたの……？」

「彼らが魔人族を恐れていたからだよ。ずっと昔からね。妬みもあった。僕達魔人族はこの世界に存在する様々な種族の中でも、特に強大な『暴力』を持っていたから。魔人族は昔から人間と^{いさか}争いを起こしていたけど、ある時に平和の道を取った。最初は徹底抗戦を掲げていたけどね。『先に手を出してきたのはお前等だ』って。でも、途中でその不毛さに気付いたんだよ。人族の中で最も数が多い純人族と比べると数も多くなかったし、新たな同族を生むにしても、僕達の繁殖力は絶望的なまでに弱かった。結局は数で押し切られる形になると誰もが予想していた。だから譲歩を重ねて平和の道を選んだんだ」

そう語るアルフレッドの顔は寂しげだった。

「でも、それが裏切られる形で少し前に大規模侵攻を受けたんだ。僕達は争うつつもりはないんだけどね。静かに暮らしたいという願いも叶わなかったよ」

「魔人族の生き残りは……」

「さっきも言った通り、今この城にいるだけだよ。でも、こんなことを言えば御先祖様たちに怒られてしまいそうだけど、純人族の言い分も解るんだ。僕達は傍から見ればいつ暴発するかも知れない危険物だからね」

軽く笑い声を漏らすアルフレッドの顔が俺の目に焼きつく。

「今は魔人族の数も減って、純人族もあまり手を出してこなくなつた。僕達は長命だけど、さっきも言った通り繁殖力がほとんどないから減らしてしまえばなかなか増える事はない。だから安心したんじゃないかな」

「……アルフレッドはそれで良いの？」

俺はつい、訊ねていた。

「良い、とは？」

「復讐とか、家族の仇とか、思ったりしない？」

「もう僕達にそんな力はないし……いいんだ。誰も争いを望んではないから。だからサレも気にしなくていいんだよ」

そうはいつでも、アルフレッドの語る物語を鵜呑みにはできなかった。

同時に、生への執着が希薄に見えた事が、俺の心に引っかかった。争いにくたびれてしまったのも解る。

でも俺自身は、理不尽な死を何度も経験したからこそ思うところがあった。もつと生に執着すべきだ、と。

「暗い話はこの辺にしておこう」

アルフレッドはパチンと一度拍手をして、話を切った。

「今の所、僕達はサレの成長を見ることに生きがいみたいなものを感じている。君を見ているのはとても楽しい。赤子を育てるというのは僕達も初めてで、昔の文献を読んだりしながらの不格好具合だけど——」

「ありがとう。皆には感謝してるんだ。家族として迎えてくれたこと、まだ一カ月だけど、育ててくれたことも」

「はは、そう言ってもらえると僕達も嬉しいな。大丈夫、僕達はサレが一人でも生きていけるまで、君を守るから」

やめてくれ。死亡フラグみたいじゃないか。

壊れた記憶の端っこに残る言葉を使つて、俺は内心で呟いた。

「そこで、早いかもしれないけど君に魔族の力の使い方を教えよう。さつきも話した通り、僕達は純人族に目の敵にされることが多いから、自分の身を守るだけの力があつたほうがいい。いずれ君にも宿る力だと思うから、早めに伝えておきたいんだ」

アルフレッドがそう言いながら立ち上がった。どうやら場所を変えらしい。

俺はおぼつかない無い足取りでアルフレッドの後ろをついていった。

連れられたのはサンクトウス城の地下だった。

アルフレッドの本棚だらけの部屋をさらに巨大にしたような大広間があつた。

いつのまにかリリアンを含む他の魔族がそこにいて、好奇の目で俺を待っていた。

皆暇そうだなあ……

「皆仕事をほつたらかして……」

アルフレッドも俺と同じように苦笑しながら頭を掻いている。

「皆、サレのこと気になってる」

リリアンが他の魔人族の言葉を代弁していた。

「しよりの無い家族達だ。まあ、気持ちには解るから今日だけだよ」

アルフレッドが告げると、他の魔人達から「はい」と表面上だけ誠実そうな言葉が返ってくる。

「さて、今日教えるのは、魔人族特有の力についてだ。他の力の使い方は魔人族じゃなくても教えられるけど、これだけは僕達しか教えてあげられない。だから、真っ先にこの力の使い方を教えよう」

ふとアルフレッドが屈んで顔をこちらに向けてくる。

「他の種族にはない特異な力だよ。純人族に恐れられる最たる要因の一つでもある」

随分と前置きが長いが、それだけ重要な力なのだろう。体力が少ないためか、少しだけ身体がだるくなってきたけれども、アルフレッドがいつにもまして真面目な顔で言うくらいだから——と気を引き締めることにした。

一度大きく息を吸って、深呼吸をする。

「よし、大丈夫。教えて、アルフレッド」

俺の言葉にアルフレッドが大きく頷いた。

すると——アルフレッドが自分の眼元を手で覆い、少したってから手をどけてこちらを見た。

何をしたのか。

その変化はすぐに把握できた。

アルフレッドの真つ赤な瞳の中に、複雑な象形が浮き上がっていた。知らない文字のようなものが描かれているが、その主体となっているのは——六芒星の図形。

正直に心境を吐露すれば、不気味だった。

血の様な色の瞳だけがやけに輝いていて——

「『グラム・イストーラ殲眼』という」

周りを見れば、他の魔人族も全く同じ象形をその真つ赤な瞳に宿していた。勿論、あのリリアンも。心臓が止まるかと思う程の壮観だった。

「説明が飛ぶけど、この世界には『魔術』という意志に準ずる力がある。意志によって事象や変化を生み出す力だ。でも、この殲眼はグラム・イストーラそれとは全く異なった性質を持つ。魔術は大抵何かを『生み出す』ことで現象とする。それが事象であつたり、変化であつたりの違いはあれど。でも——この殲眼は『何も生み出さない』」

なんとなくアルフレッドの言わんとする事が解った。

「この殲眼は全てを壊す。グラム・イストーラ……口で言うより、見た方が理解しやすいかな」

半ば茫然としている中、アルフレッドが視線を逸らし、小さく言葉を発していた。

「砕ける」

短く、儚い言葉だった。

次に、耳をつんざく破裂音が俺の背後で鳴った。

振り向けば、アルフレッドが視線を向けていた大広間の床が大きく抉れていた。大理石で出来ていると小話に聞いていたその床は粉々に炸裂し、俺の身体がすっぽりと入ってしまいそうな大きさの半球状にぼっかりと抉られていた。

——いやいやいや、ちょっと、やり過ぎじゃありません？

未知の力に好奇心を覚える最中、同時に、恐怖も抱いていた。アルフレッドが言うように、その力が仮に俺にもあるとして。

——もしそれが勝手に発動したら。

背筋に悪寒が走った。

「焦点を合わせるだけで良い。あとは俗に言う『悪意』や『害意』を込めれば——こうなる」

えぐれた床面を手でなぞりながらアルフレッドが言う。

「勿論、この穢眼にはリスクもあるよ。説明しづらいけど、抽象的な言葉に置き換えれば身体の活力が減って行く。反動と称するべきかな。多用すれば立つことすらままなくなるだろう」

破格の効力に比べれば安い代償だと思う。

「そしてもう一つ。絶対に忘れてはならない『兆候』がある。いい

かい、これだけは忘れちゃいけない」

アルフレッドが続けて紡いだ。俺は大きく息を飲んで言葉を待つ。

グラム・イストラ

「殲眼を多用するといずれ『血の涙』が出る。それは殲眼の限界を表す身体反応だ。血の涙が出たらそれ以上は絶対に殲眼を使つてはいけない」

「使い続けると？」

「死ぬ」

全然安くなかった。

「血の涙が止まらなくなるんだ。ほどなくして失血死するだろう」

こええ……

「血の涙が眼から溢れた時点で発動をやめ、しばらく眼を休ませれば血の涙は止まる。だから、止まるまでは絶対に殲眼を使っちゃいけない。これは魔人族が覚えておかねばならない制約の一つだ。それと、殲眼には二次的なリスクもある」

「二次的？」

「そう。魔人族が恐れられる最たる理由がこの殲眼にあると言っただろう？ だから、魔人族を知る敵対者は大抵真つ先にこの眼を潰しに来る」

生々しい話になってきた。

グラム・イストラ

純人族と何度も争ってきたと言うのだから当然なのかな。確かに殲眼の効率的な使い道として真つ先に思いつくのは兵器としての活用だし。まだ『争い』という単語にいまいちピンと来ないけど。

聞かされたリスクのおっかなさも相まって、実は結構震えてまし

た。

「だから、もしサレが純人族の領分に身を置く時は、極力この力を使ってはいけないよ」

そりやそうだ。バレたら死に直結しかねない。

それにしても、純人族の領分に身を置くことなんてあるのか。さっきの話を反芻すればするほど、純人族が魔人族を目の敵にしていた、あるいは今でもしている、という事実が浮き彫りになっていった。あんまり考えたくない。また死ぬのは嫌だし。悪意をぶつけられるのだって楽なもんじゃない。随分と慣れたのは確かだけど、慣れて良かったと思えるものでもない。慣れれば慣れる程、別の何かが失われていくような気がして。

「今日はこのくらいにしておこうか。よくよく思えば、まだサレはほとんど赤子だからね。どうしてもこれだけは知っておいて欲しかった。魔人族として」

うん、俺も早めに教えてもらえてよかった。後々になって得体の知れないとんでも能力が暴走しました、とかじゃ笑い話にもならないからな。

俺は魔人族であるという自覚を強くして、アルフレッドの言葉に大きく頷いて見せた。

俺はこの世界について知らない事が多すぎる。今頃になって、新たな生を受けたことに気付いたような気がした。

——嬉しくもあり、寂しくもなった。

第二の人生？ まさか。数えてないけど、少なくとも第十の人生くらいなのは間違いない。それに、最初の人生について明確に覚え

ているわけでもない。

過去に縋りつくのはやめた。どうせなら、前を見よう。

——その方がおもしろい。

そう無理にでも思わないと、胸元辺りを襲う嫌な浮遊感になされるがまま、宙に浮いてしまいそうだった。

芽生えた思いを胸にして、俺は身体を襲う倦怠感に身を任せた。

2話 「殲眼」(後書き)

中二街道まっしぐら！

3話 「独善」

前言を撤回しよう。月日が流れるのは早かった……

アルフレッドが妙な死亡フラグ的発言をしてからなかなか安らぐ事の無かった心持だが、そんな不安をよそに時間は淡々と進み、十五年が過ぎた。

十五年。十五年だよ！？

俺の成長日記（著アルフレッド）をこそそと盗み見ながらどういった具合でここまで来たか振り返ろう。うわっ、アルフレッドって意外と字きたねえ。几帳面そうなのに……

子育て一年目。

俺、一歳。

『サレに尻尾が生えた』

……な、なんだってー！
ぐっすりと寝て、起きたら生えてたんだ。これ何言ってるか解らないと思うけどマジなんだ。さすがのアルフレッドもかなりビビってた。

真っ黒な毛が生えた尻尾。

細長いけど結構ふさふさしてる。尾の末端の毛は長くて、若干丸身を帯びてるように見える。ふさふさ、ぼふあ、って感じ。擬態語はんざーい。頭頂部まで余裕で届く長さがある。十分な長さがある上に、ぼふあってなってる先端以外は細いから結構器用なこともできたりします。

生えた当時はいきなり重心が変わったせいか、結構な頻度で転んでたなあ。

触り心地が抜群らしく、今でもリリアンの玩具にされてる。撫でられるとかなりくすぐったいのでやめてほしいです。あと握られると物凄く痛い。

『サレの尻尾はよく感情を表現している。喜んでる時や楽しい時は盛大に尻尾が振られていて、解りやすい。……僕も触りたいなあ』

アルフレッドさん、真顔で実はそんなこと考えてたんですね。というかそんなに振ってるつもりないんだけど。……どんなに隠しても尻尾のせいで内心がバレるのはいただけない。

最近、リリアンといるときは玩具にされると面倒だからよく腰に巻いて服の中に隠すようになりました。外に出しておくと手を使わずに物を持ち上げたり取ったり出来るから便利なんだけどね。

『古の魔人族には尾が生えていたというが、先祖返りでもしたのだろうか』

へー、昔の魔人族って尻尾生えてたんだ。初耳。

子育て二年目。

俺、二歳。

『サレの^{グラム・イストラ}穢眼が発現した』

忘れもしない。俺が赤子の時運び込まれた部屋がそのまま俺の部屋になったんだが、二歳にしてその部屋を全壊させた。不良少年ならぬ不良幼年と称するのが相応しいだろうか。

……冷静に顧みると、あれは危なかった。感覚とか感情とか、そ

ういう個人的で曖昧な要素に呼応しやすいものだから、発現と同時に最初は自制がうまく利かなくて乱発。血の涙が出ても止まらなかったで、結局アルフレッドが無理やり俺の瞼を閉じて視界を閉じ、一段落した。

恐怖心が自分以外のモノに対しての忌避感に繋がったのか、それが結果的に害意に繋がったのか。遠ざけようと思ったことが逆にまづかったのかもしれない。

その後リリアンに縋りついて一日中泣いたのを覚えている。その頃にはリリアンは母のような、姉のような存在として俺の中で認知されていたといえよう。相変わらず生肉食ってるけど。

——なんだろう。あの包容力は魔性だと思ってる。

子育て五年目。

俺、五歳。

グラム・イストーラ

『職眼をおおよそ使いこなせるようになったみたいだ。五歳というが、もう随分と自由に動き回れるらしい。サンクトウス城の窓ガラスはサレが割る為にあるのだと最近思うようになった。張り替えが間に合わないよ……』

その節は申し訳ありませんでした。反省しています。動きたい盛りだったのです。

子育て八年目。

俺、八歳。

『魔人族の男性陣でこの頃サレに様々な稽古をつけるようになった。皆サレが可愛いらしい。奪い合いが激しいが、今は大目に見よう。防衛力をつけるには絶好の機会とも言える』

俺の可愛さに骨抜きにされたらしい。

……嘘だ！　じゃなきゃあんな厳しい稽古しないだろ！

かれこれ随分と死を経験してきたが、魔人族の男性陣に稽古をつけられるたびに『また俺死ぬのかな……』とか思ってたんだぞ！
肋骨三本骨折、右腕尺骨骨折、左鎖骨骨折、半月板パリーンした時はさすがの男性陣も女性陣に物凄く叱られてた。

アルフレッドを見てると忘れそうになるけど、魔人族の男って結構豪気豪快な奴が多い。極端。アルフレッドみたいな紳士風のやつと、どここの歴戦の猛者だよ、みたいなやつに分かれる。でも実は前者の方が稽古は厳しかったりする。顔は笑ってるけど目が笑ってなかった。

『めきめきと成長するサレを見てみると、自分の技術を全部習得させてみたいという欲求に駆られた。ちょっとやり過ぎたかな……』

ほらみる！　アルフレッドの稽古もかなり辛かったんだぞ！　ちなみに半月板パリーンはアルフレッドの仕業です。

子育て十年目。

俺、十歳。

『リリアンは相変わらずサレにべったりだ。僕が愛用している子育て白書（改訂版）によると、そろそろサレも反抗期に入る頃。窮屈じゃないだろうか』

もう慣れた。

だけどサンクトウス城の大浴場にまでついてこられるのは困る。

もう少し女であることを気にして欲しいです。ただでさえ老いを知らないぴっぴちな身体なんですから年頃の僕を氣遣ってください。……あえて言おう、素晴らしいボディであったと。他意はない。

子育て十二年目。

俺、十二歳。

『サレの身体もおよそ完成に近づいてきた。身長も伸び、傍から見ると細いけど、サレの身体はあらゆる戦闘状況に対応できるようになっているはずだ。女性陣にあんまり筋骨隆々にしないでくれと日々言われていたから、入念に訓練内容を考えて鍛えた。曰く、色んな服を着せられなくなるから、らしい。僕には良く解らないけど、女性陣を怒らせると怖いから大人しく従っておいた。ともかく、その甲斐があつたというものだ。僕にとつてはあまりに昔のことだ。記憶も微かにしかないが、大体この辺りから身体の成長は止まるはずだ。こればかりは子育て白書（改訂版）も通用しない。身体の完成と同時に、魔人族の身体は当分の間その若さを保つたままになる』

男性陣の拷問という名の稽古に耐え、その後女性陣の着せ替え人形になるというのがあの頃の生活習慣でした。女装までさせられるとは思わなかった……

御蔭さまで十二歳の頃から全く身体は歳を取りません。アルフレッドの話だと、人族の一つの基準である純人族の年齢に換算して、大体二十歳くらいらしい。魔人族の成長は早い、完成と同時に止まる。言ってしまうえば、全盛期を保ち続ける。便利な身体だけど、老いを知らないっていうのは別の苦悩の種にもなりそうだ。ちなみにアルフレッドはあれで二百歳を優に超えているらしい。大抵魔人族は途中で自分の歳を数えるのが面倒になるっていった。せめて百歳まで覚えていようと心に誓った。

ちなみに精神の方は昔から変わらずそこはかとなく強靱だと自負

している。俺には開き直るといふ最終手段があるのだよ。
伊達に何回も死んでない。

子育て十四年目。

俺、十四歳。

『二年前から女性陣に魔術の手ほどきを受け、大方習得したといつても良い。もう、一人でも自分の身は守れるだろう。サレを拾ってからここまで、随分時が進むのが早かった気がする。僕達は一族の数が激減してから目的を見失っていた。そんな中、サレは僕達の心を鷲掴みにした。彼は僕達の光で在り続けるだろう』

こそばゆいです。

そして——女性陣の魔術稽古も男性陣に負けず劣らず凄まじかった。俺を着せ替え人形にしてる時のあの楽しそうな『キャッキヤ、ウフフ』的な顔はどこへ行つたんだと心底思った。ちょっと女性不信に陥りかけた。

魔術は、体内に宿る魔力を糧に、意志に応じて事象や変化を生ぜしめる術である。

単純に言えばこれに尽きる。

第一歩が何よりも辛かった。魔術の素、燃料とも言える体内の魔力を感覚的に把握するまでが最初の壁らしい。リリアンが相変わらずの鉄面皮で『感覚を掴むまで生肉あげない』って言ったんだ。最初は生肉なんかいらないし、とか思ってたけど——

リリアン独特の言語で『生肉』が『ご飯』に直変換されるのを知ったのはこの時だった。

他の女性陣も『死にかけた方が早いんじゃない？』とか言いだす始末。おい、やめろ、俺はもう何度も死にかけた。

結果として餓死寸前で感覚が鋭敏になった為、魔力の流れを掴むことができたんだが……もうやるものか。

ちなみに断食後の最初の食事は生肉でした。食えるならなんでも良かった。すごくおいしかったです。

その後、意志によって魔術を発動させる訓練も行われたが、それもまた酷い訓練だった。飴と鞭とかそんな生ぬるいものじゃなくて、生か死か。そのおかげか上達も早かったっぽいけど、肝心の俺は生きられただけで満足です。本当に彼女達は俺を守ろうとしているのだろうか、不安になった。

魔術が学と術に体系される以上、学の方も説明されたが、そっちはなんとなくしか覚えてない。大抵、午前に学の講義、午後に術の実技だったんだが、実技が怖すぎて午前中は大概震えていました。とりあえず、魔術にも色々な種類があるみたい。意志の練り込み具合や、練り込み方で効力も様々なんだって。女性陣が『外敵に殺られる前に殺る』という教育方針を絶賛支援中だったので俺はかなり直線的な攻撃魔術ばかり覚えさせられた。これ過剰防衛じゃない？　と思われる類の魔術が多いのは気にしないことにした。サンクトウス城の周りの森がちょっと吹っ飛んじやったのも不可抗力です。あと、体内の魔力には絶対量があつて、魔術を行使するたびに減って行くんだけど、体力と同じで休めば回復する。回復速度はまちまち。少なくなってきたと貧血っぽくなる。全部使いきればもれなく倒れること間違いなし。

そして今は十五歳。

俺の成長日記帳（著アルフレッド）を元の場所にしまつて、俺はサントウス城の外に出た。

この集落イルドゥーエの領地はサントウス城以外は森に覆われていて、いかにも世俗から隔離されているという印象を抱かせる。最近はこの森の中を散歩するのがささやかな趣味だ。ずっと城の中つても窮屈だからさ。良い気分転換になる。

アルフレッドたちも快く許可してくれるのが現状だ。リリアンたち女性陣はいつも心配そうに引きとめてくるけど。

「髪、伸びたなあ」

前髪は目に掛かっていて、ふとそんなことを思った。俺の髪型はおおよそ女性陣の好みだ。横髪は長くて、肩に掛かりそうな勢い。後頭部の髪はそこまで長くない。襟足長いのが嫌いだったので襟足はバツサリ切つてある。全力で女性陣に反抗してなんとか切ることを許された。でも、耳を覆い隠している横髪は切ろうと思つたら今度は女性陣に全力で止められた。

くそつ、あの時は『権利の等価交換』とかリリアンに言われて納得しちゃったけど元から俺の髪は俺の物だよ！ なんてあたかもそっちに俺の髪の権利があるような言い方をしたのか。彼女達は策士である。俺が間抜けであるか否かは置いといて。

前髪も、もしグラム・イストラ殲眼の紋様が浮かびあがつてしまつたら隠せるように、とアルフレッドたちまで加わつて切れずにいる。どこことなく女っぽいかもしれないけど、まあ、基の顔が顔だしそこまで不自然ではないだろう。たぶんだけど。

左腰に剣、腰の背中側に採集用の小型ナイフを佩いて、尻尾を盛大に振りながら森を闊歩する。

散歩するついでに食料調達って寸法だった。

イルドゥーエ領内のこの森は動植物の宝庫。

何よりここまで育ててもらったからには少しでも恩返しをしたい。
鬱蒼とした森だけど、城に籠っているよりは解放的な気分になる。
鼻歌でも歌いたい気分だ。十八番はもとより、レパートリーが皆無
なんだけどね……

そんな事を考えていると――

「獲物はつけーん！」

白い体毛の犬ところ。……犬？ まあいいや。体長は俺三人分くら
い。書庫の図鑑で見た犬よりでかいな……

――いやでかすぎるだろ。

前足とか俺の腕三本分くらい。さすがに殴られたら痛そうだ。腕
くらい軽く持つて行かれそうな気がする。

森を散歩するようになったのは近頃の話だから、見た事のない動
物がいて楽しいなあ。

「あ、気付かれた」

大声を上げたのがまずかったようです。

向かってくるかなあ、とか思ってたら、犬ところは俺を見るや否
や一回だけビクリと身体を震わせて、次の瞬間には猛烈な速度で逃
げ出していました。

くそっ！ 逃げるな食料！ 野生動物の意地を見せろよ！

咄嗟に近場の大木の枝を掴んで、逆上がりっぽく勢いをつけて枝

の上に立つ。見える見える。

そのまま他の大木に飛び移りながら、徐々に犬っころとの距離を詰めた。

グラム・イストラ

殲眼を使えば目視できる時点で決着がつくけど、頼るのは良くないと思う。癖になると後々面倒だ。切り札は隠し通すべし。

「脳天直撃剣！」

我ながら酷いネーミングセンスである。ちょっと遠いけど思いつきり跳躍すればなんとか追いつけそうだったので、大きく大木の枝を蹴ってそのまま犬っころの背中にダイブ。空中で左腰の両刃剣を抜いて、着地と同時に真上から両手で剣を脳天に突き刺した。

「グルル——……」

こと切れるのは早かった。あつけないと言えばその通り。

どしん、と音を立てながら倒れる犬っころの背中から飛び下りた。

「ごめんね、食べさせてもらっよ」

生きるためには食べなければならない。経験上、生死に敏感だからこそ、生き物を殺し、食べることに忌避感はなかった。死生観については五回目あたりの死亡時までなんとなく考えてはいたけど、結局はつきりした答えは出せていない。いいんだ、それでも悟ったから。

——俺は！俺が良ければそれでいいと思っているのだよ！

偽善的と馬鹿にされようが、独善的と罵られようが一向に構わん。フハハ。

果たしてその自論がどの範囲まで通じるのか、自分でも解らない。その時にならないと解らないこともある。そうなった時に後悔したとしても、責任は自分にあるのだからまだ気が楽だ。

とりあえず血抜きだけ済ませ、今度はナイフを抜いて犬つころを解体していった。さすがに全部はもっていけねえわ。残りは他の動物が喰いに来るだろう。

「……ん？」

肉を切り取っていると、なんとなく嫌な視線を感じた。見られている、という漠然とした感覚。

その感覚が事実だと物語るように、次の瞬間には異変が俺を襲っていた。

「おっと——」

背後から何かが投擲されたのを確信する。明らかに一瞬殺気を感じた。振り向き、自分の背後へ投擲されたものを目視する。一本の投擲短剣だった。投げナイフ。

殲眼を使うまでもない。俺は尻尾でそのナイフの柄を巻き込むようにキヤッチして、そのまま即座に飛んできた方向にリリースする。尻尾ふりふり。

がさつ、と繁みが揺れるが殺気の主は姿を見せなかった。

まあ、あの程度の使い手なら放っておいても問題はないだろう。それより肉が新鮮なうちに持って帰るべきだ。

「一応アルフレッドに報告しておくか……」

そう呟きながら、俺はサンクトウス城への帰路についた。

4話 「崩壊」

十六歳になりました。

少しだけ変わったことがある。

アルフレッド達が率先して自らの訓練を開始していた。物騒な事でもあるのだろうか。

「はは、何、サレを見ていたらまた鍛えたくなつてね」

若すぎだろ。

「最近森の方はどうだい？ 前にちよつと変な事があつたって言っていたけど」

「いや、あれからは何も。なんだったのかなあ」

「次会った時に確かめればいいさ」

「それもそうか……」

年齢的には凄まじいまでの開きがあるものの、アルフレッドたちは父であり、兄のようだった。リリアン達が母であり、姉のようであるのと同じく。何分複雑だから深く考える必要はないだろう。大切な家族であることは確かだ。それだけあれば良い。

「んじゃ、俺はまた森に行つてくるから」

「解ったよ。気を付けてね」

踵を返す。

アルフレッドの言葉には尻尾を振ることで応えておいた。

俺、十八歳。成人しました。

大人の仲間入りをしたらしい。全くそんな感じはしないけど。だって周りの面々は誰も老いてないし……時が進んだって感じがしなくなってきた。

サレ・サターナという名前を付けられてから十八年も経ったのか。頭では解っているつもりなんだがどうも実感が湧かない。

成人の儀は盛大に執り行われた。盛大っていつてもサンクトウス城一階の大広間に魔族の皆が集まって騒いだけだけど。

俺以上にアルフレッドたちのほうが楽しんでた気がする……

——それにしても、少しサンクトウス城が窮屈になってきた。

城はもちろんのこと、イルドゥーエ領内の森も大体歩き切ったし。かといって、イルドゥーエ領内を出るのも少し気が引ける。

だが、そんな俺の心境を見透かしたようにアルフレッドが言った。

「サレ、そろそろイルドゥーエを出てみてはどうだい？ 君に僕らが教えられることはもう何もない。もつと見分を広めた方が、生きるのが楽しくなると思うよ」

アルフレッドたちには俺の記憶の断片を話したことがある。俺が生に執着していることも、それとなく知っているのだろう。

俺はベッドに寝転がりながらアルフレッドの言葉に答えた。

「でもさ、純人族って大抵魔族を目の敵にしてるんだよね？」

「皆が皆というわけじゃない。魔族が純人族と和平を結んでいた時には僕達を快く受け入れてくれる人たちもいたよ。そういう見識

の違いも、自分の眼で見て、耳で聞いて、確かめた方が早い」
「そう言われると頷くしかないけど……」

まだ荷が重いと思ったら帰ってくればいい。

「——解った。なら、行ってみるよ」

「決まりだね。実はもう旅用具は揃えてあるんだ。明日僕の部屋に受け取りに来ると良い」

「合点了解」

軽く了承の意を示して、寝がえりを打った。

次の日。

「おい……これが旅道具とかどれだけ豪奢なんだよ……」

アルフレッドの部屋に訪れると、旅用具と称して様々なものを渡された。

「えーと、これが《宝剣ジュワイユーズ》。かなり昔だけど魔人族の皇族が使ってたものだね。宝物庫にあったんだ」

渡された剣は真つ黒な鞘に収まっている。鞘の腹には金地の金属で紋様が描かれていて、ピシッと整った直線形の柄と鍔も同様に黄金色に彩られていた。

——これ金だね？ 絶対金で作られてるよね？

さらに目を引くのは刀身。柄を握って剣を抜いてみると、そのあまりに贅沢な色を発する刀身が露わになった。いかん、輝きが眩しすぎて目に悪いぞ。

「これ、刀身はなにで作られてんの？」

「エシエント・クォーツ永晶石と呼ばれる輝石だね。ダイヤモンドの希少版って言ったところかな。余程のことではなければ刃が欠けたりしないから安心して振るうといいよ。ちなみに柄頭の宝玉も永晶石で出来てる」

確かに柄頭には同じような輝きを放っている宝玉がある。真球状と見紛うまでに丸い宝玉だ。

アルフレッドがいう『余程のこと』の加減を今まで数々見せられてきた俺は、その刀身が欠ける事は一生ないんじゃないかなあ、なんて思わずにはいられなかった。

それにしても眩しい。ダイヤモンドと例えていたが、まさしく、そのしつこいまでの輝き方と、光が当たる角度で様々な色合いを見せる性質はダイヤモンドそのものだった。

オブシディアン

「あと、黒曜石で造られた狩猟採集用の短剣に、リリアンが三年かけて作った旅服一式。丈夫さは折り紙つきだよ。サレのために尻尾も出し入れしやすいようになってるしね」

オーダーメイドってやつらしい。

それにしても、微妙に金糸と銀糸が使われているように見えるのは気のせいだろうか。

「布は宝物庫にあった色んな服から良い所を部分ごとに拝借したんだ。糸に輝石を混ぜ込んであるから余程の事じゃないと切れたりしないし——」

合点了解。深く考えるのはやめよう。丈夫な服、丈夫な狩猟短剣、丈夫な剣。そのくらいに思っていた方が楽そうだ。

あー、でもこれ全部売ったらいくらになるんだろうなあ……

貨幣価値に疎い俺でもこれらの代物が高額で売れることくらい解る。いや、売らないよ？ 売らないって。たぶん。

「あとは薬とか野宿セットとか細かい備品は全部革の袋に詰め込んでおいたから。それを持ってマントを羽織れば完成さ」

アルフレッドの眼が輝いている。早く着て、と目で訴えかけられているようだ。

しょうがないからその場で渡された宝剣と短剣をそれぞれ左腰と背腰に佩き、旅服に着替え、荷物を背負った。なかなか動きやすい。どことなく優雅な雰囲気を漂わせている服だが、旅服としての機能も十分なようだ。ついさつき採寸したかのように、サイズはぴったり。おそらく魔族の皆が愛用している貴族風の服を原型に旅服としての機能を付け加えたのだろう。ひそやかに内装のベストの胸元に括りつけられている赤い輝石が綺麗だ。

そして最後に身体が膝もとまで隠れる大きな黒いマントを羽織る。マントを首元あたりでペンダントで固定し、アルフレッドに向き直った。

「いやあ、様になってるねえ。良かった良かった。そのペンダントは僕達皆からの贈り物。僕達が魔族である所以、穢眼の紋様でもある六芒星の象形が刻まれたものだ。皮肉っぽいといえばその通りだけだね。僕達が確かに家族である証拠にもなる。僕達の家紋といってもいい。ペンダントくらいならあんまり人目につかないし、ただの六芒星だから誰も特別な感情は抱かないと思う。安心するとい

ペンダントの下地は光沢のある赤で彩られていて、その上に黒い線で六芒星が描かれていた。

「さあ、準備は整った。気が変わらないうちに行きなさい、サレ」

アルフレッドが促してくる。

荷物の中身はあとで確認しよう。

「今の台詞、親っぱかったよ」

「練習したからね——」

少しさびしそうな表情でアルフレッドが返してくる。

「そっか。うん、行ってくるよ。——疲れたらまた戻ってくるから」

「気にせずにお行き——」

アルフレッドとの別れは思った以上に呆気なかった。

「サレ、気を付けてね」

サンクトウス城の正門まで歩を進めていたら、突然背後から声を掛けられた。

リリアンが小走りにこっちに走ってきて、俺の頬に真っ白な手を添えてくる。

「ありがとっ、リリアン」

相変わらず表情の変化に乏しい顔だけど、寂しそうなのはなんとなくわかった。

「俺の家はここだし、また帰ってくるよ」

「……いつてらっしゃい」

少し詰まり気味に声を出しながら、リリアンが俺の背中を押した。

「行ってきます」

やっぱり呆気ないけど、こんなものかなあ。

なんか言葉じゃなくて、行動で表される死亡フラグみたいだけど

その時の俺はアルフレッドの死亡フラグ乱立に慣れていたせいかな、その事について深く考えなかった。

「結構歩いたなあ」

イルドゥー工領内の森で一度立ち止まって感慨深げに言ってみた。鬱蒼と生い茂った繁みの奥の方に見えるのはイルドゥー工領内と領外の境界線を示す大樹。

あの大樹を跨げば、そこからは魔人族の領分ではなくなる。

本当ならもっとドキドキするものなのだろうけど、今更になつてアルフレッドやリリアンとの別れの呆気なさが頭の中で引っかかっている。

自分でもいつここへ戻ってくるか解らないのだから、一旦戻って訳でも聞いておこうかなあ。でも戻るのも面倒だなあ……

結局、大樹までゆっくりと歩を進めた。大樹に背を預けるように座り込んで、境界線を越える前に思い残しがないか確認しよう。そんなことを思っていたら――

いつかのどこかで感じた『ねっとりとした視線』を感じた。

不穏だ。

視線を気取られている時点でたいした敵対者でないことは明らかなのに。どうしても他の要素と連鎖して異様に不穏な気分させられる。

「……誰だよ」

一応訊ねてみた。

返答はない。あるわけないか。

「もやもやする……」

やっぱり一旦戻ろう。

そう思っただけ俺は首をもたげてサントウス城の方角に視線を向けた。

視界のずっと奥の方で、赤い光とどす黒い煙が上がっていた。

煙……？

嫌な予感は倍増して行く。

俺はすぐに立ちあがって地面を蹴った。

まさか。こんな短時間のうちに何か起こるなんて有り得ない。誰かがたき火を燃やし過ぎたとか、きつとそんな下らないことに違いない。

やめろよ、悪い方に考えるのはやめろ。

俺は独善的でいられれば、それで良いんだ。そうすれば開き直れるし、自分の事だからたとえ不幸が振り掛かってでも納得できる。

でも――

気付いた。

俺は……俺と近い者の不幸に対して耐性がない。

何度も死んだことで得たのはささやかな独善性と、生への執着心。

俺は良い。俺なら良いんだ。

思考が悪い方向へ循環し始める。

今までの、この十八年間の様々な出来事が繋がって行って、他愛

のない日常の会話までもが記憶の引き出しから取り出されていった。

——大丈夫だ。アルフレッドはあんなに死亡フラグ立たせても死ななかったし。

心のどこかではそう思っていなくて。

息を切らせてサンクトウス城の正門に辿りついた時——

俺は自分の眼を疑った。
火。煙。血。

倒れている家族達。知らない軽鎧の人達。

「ははは、なんだよ、どうしたんだ？」

争った形跡だけが残っている。サンクトウス城は所々削り取られていて、地面が抉られていて。倒れている者達の身体は欠損している。

——いつもみたいに少し森へ行っただけじゃないか。

——なんで今日なんだよ。

「はは……」

乾いた笑いが口から漏れるのを止められない。

家族達の眼は、一つ残らず繰り抜かれていた。

真っ黒な双眸がこちらを見ている。そんな気がする。

「……っ！ 誰か生きていないのか！」

やめろ、言うな。自分から彼らが死んでいると認めているものじゃないか。

「サ……レ……」

今にも途切れそうな声が目をつついた。
リリアンの声だ。俺が間違っ筈がない。

「どこ！？ リリアン！？」

周りを見渡せば、幾人もの魔族の死体が倒れている場所で、少しだけ動く彼女の姿があった。

両眼は皆と同じように繰り抜かれていて——
傍には微動だにしないアルフレッドの死体があった。

「戻って……きちゃった……の？」

「大丈夫だ！ 今助けるから！」

その慰めは偽善だ。

リアンの顔は双眸から延々と流れ落ちる真っ赤な血に染まっ
いて。

「サ……レ……『行つて……らっしやい』」

ああ……

さっきと同じように俺の頬に触れた彼女の真っ白な手は、その言
葉の後に――

力なく地面に落ちた。

「あ……あ……」

リアン、もう一度俺の頬に触れてよ。

お願いだから、そんな優しい顔で死なないで――

「――うわあああああああああああああああああ……！」

叫ぶ。

喉が枯れる。

もうどうでもよくなった。

もういい。
解らない。
もういい。
解らない。
こんな所――

壊してしまおう。

「全部ッ……！！ 消えちまえええッ！！」

俺は視界に入る家族達の亡骸を見て、城を見て――
全部壊れてしまえば良いと、強く願った。
眼が焼けるような感覚を得て――
視覚が途切れた。

……。

ちくしょづ。

4話 「崩壊」(後書き)

超展開!!

5話 「生痕」

激情で発動させた殲眼が及ぼした影響は多大だった。

視覚が途切れ、意識も途切れ、次に目を覚ました時、俺の目の前には更地が広がっていた。サンクトウス城も、地面に横たわっていた家族たちも、見知らぬ者たちも、全てが壊れた。その地面さえも奇妙な形に挟られていて、ようやく自分が激情に任せて起こしてしまった惨状に気付いた。

「……アッハッハ」

乾いた笑い声しか上がらない。

自分が寝転がっている地面だけが無事で、その他の地面の標高は低くなってしまった。

アルフレッドやリリアン、そしてその他の魔族の遺体も全部消えていた。

「自分が何をしたか解ってんのかよ……」

乾いた笑い声の後に、自分を責めるような言葉が勝手に口から紡ぎだされる。

解ってるよ。

見ていたくないから、全部壊れてしまえば良いと願った。

「俺自身の、独善的な思いによって——」

彼らは死んでいた。それでも、俺は俺のために彼らの死体を壊し

て——

「俺は彼らを壊したんだ」

そうだ。俺が壊した。赤子の時から、ずっと育ててくれていた親同然の家族達の骸を。

——俺が納得したいがために。

俺は頭のどこかがおかしいのだろうか。

でなければ、骸と言えども、彼らの軀を、そして思い出が詰まったこの城を壊そうとはしなかったはずだ。普通なら、墓でも作ろうとしたのだろうか。

違う。俺は納得できなかった。俺の視界に入った光景の全てを否定したかった。

幼稚なのかな……

まだ少し、両目が痛い。

目を手で拭いてみると、グラム・イストラ殲眼の反動で溢れ出た血の涙がこびり付いた。今もう血の涙は止まっている。

「……そうだ。それでいい。独善的であれ。自分の事だけを考えればいい」

ハハハ。

……。

——そんなこと……出来る訳ないだろう。

ずっとその場で力なく寝ころんでいるのは楽だった。
考え事だけが次々に浮かんでくる。

なぜ、アルフレッドやリリアンが呆気ないほど簡単に、簡素に、
俺を旅に駆り立てたか。

そういえば、と冷静に働き始めた頭の中で言葉を紡ぐ。
アルフレッドが持たせてくれた荷物の中に、何か入ってないか。

「……やっぱりあった」

十八年も付き合っていたせいかな、なんとなくそんな気がしたんだ。
ビッシリと色々なものが詰まっている荷物の中から、薄い日記帳
のようなものを見つけた。

表紙には『サレヘ』とだけ書かれている。

俺は震える指先に力を入れて、その日記帳を開いた。
書かれていた内容は衝撃的で、どこか確信的で。

俺の頭は書かれていた内容をすんなりと受け入れてしまった。

『サレヘ。この文章を読んでいる頃には森を抜けて純人族の領地
へと足を踏み入れているかな。もしかしたらもう夜になっていて宿
を取ったりしているかな』

そんな書き出しだった。

『ここには君の出生、境遇に関することが書かれている。僕達が

独自に纏めたものだ。二年前から、僕達一族は交代で純人族の領地へ潜入して、様々な情報を集めていた』

だからアルフレッドたちはいきなり訓練を始めていたのか。

『結果、君の素性が確認できた』

その一文を読んで、嫌な胸の高鳴りを覚えた。知りたい、でも、知ることでは何かを失ってしまうかもしれないと、漠然と予想してしまった。

俺は意を決して次のページに目を走らせた。

『最初に言おう。サレ、君は確かに魔人族だった。僕達と同じ種族だ』

—— ああ、良かった……
心底ホツとしてしまう。

『ただ、君の魂は様々な陰謀に絡められていた。縛られていたと言っても良い。君は言ったね、俺には赤子以前の記憶がある、と。その記憶は半ば壊れていて曖昧だけど、確かに何度も死んだ、殺された、と』

……。

『君の出生の秘密は——イルドゥーエの西、君が今から向かうとしている、もしくはもう到着しているかもしれない純人族の一国《アテム王国》にあった。イルドゥーエの隣国だ。実の所、魔人族が最後に臨んだ戦がアテム王国との戦だった。最も苛烈で、最も悲しくて、最も魔人族を奪った戦だ』

俺の出生が……どういう風に純人族と関わっているのだろうか。

『君には何度も言ったかもしれないけど、昔、魔人族はもっと多く存在していた。まだ魔人族が多く存在していた頃、イルドゥーエは皇国だった。イルドゥーエ皇帝がいて、主権を持ち、確かな国家としてこの世界に存在していた。その頃から、アテム王国を含む様々な国と戦っていた魔人族だけど、特にアテム王国は魔人族の滅亡を率先して望んでいた。理由は様々あっただろうけど、今はおいておこう』

アテム王国か。

『最も魔人族の滅亡を望んでいたアテム王国は、遥か古に《ある計画》を立てていた』

計画……？

『魔人族と何度も交戦していたからこそ、アテム王国は魔人族の強大な力を熟知していた。個人の力量差が違い過ぎることを理解していた。だから、ある時からアテム王国は——』

魔人族を作ろうとした。

アテム王国に忠実で、従順な魔人族。『魔人族を滅ぼす為の魔人族』を。

『計画の第一段階は魔人族の軀を手に入れることだった。およそ千年前に、アテム王国は老いた魔人族の一人の軀を確保した。そしてさらに、数百年の膨大な時間を掛けて、骸となったその魔人族の

軀を魔術によつて若返らせることに成功した』

馬鹿な。そんな魔術が可能なものか。

『数百年を掛けて、莫大な数の魔術士の一生と、膨大な量の魔力を糧に、それを可能にしてしまった』

狂つてゐる、とだけ思った。

『魔人族の軀は若返り、器として、武器としての力を十分に取戻した。次に、アテム王国はその器に入れる魂を作ろうとした』

嫌な鼓動が聞こえる。

『その魂の元が……サレ、君だった。アテム王国は再び大規模な魔術を使い、君の魂を何処から召喚した。呼んだんだ。何処からきたのかは解らない』

あまりに狂氣的だ。

『君は違う世界からきた誰かだったのかもしれない。彼らですら、それを知らない。ただ、《そういう魔術》としか認識していなかった。莫大な数の魔術士の妄信とも言える意志の力がその魔術を現象にした。そしてアテム王国は、何処から呼んだその魂を——歴代のイルドゥーエ皇帝の中に無理矢理押し込んだ』

入れた。どうやって。

『アテム王国は、魔人族生成とはまた別に、魔人族を滅ぼす事に特化した人を育てていた』

ああ……大体予想はついた。

『魔人族を滅ぼすとまではいかないまでも、イルドゥー工皇帝と相対するくらいの力はあった。だから、その者に君の魂を持たせ、相対と同時に魔術で押し込むよう仕込んでおいた。こんなにも複雑で、大半を天運に任せるような手段が——成立した瞬間だ』

でも、なぜ？ なぜすぐに器に魂を入れなかった？

『なぜわざわざそういう過程を経たか。少し抽象的だけど、それは彼らが呼んだ魂、あるいはそれに付随する精神自体をも、強靱にしておきたかったからだ。歴代のイルドゥー工皇帝という魔人族に魂を入れ、徐々に魔人族の体に順応させ、同時に、その軀に染み付いた戦いの記憶を引き継がせたかった。どれほど器が優れていても、相手は同じ魔人族だったから。別の箇所で既存の魔人族を上回らなければならなかった。そして彼らはその方法に確信を得ていた。軀に魂が癒着する前ならば、大した障害もなく魂を取りだせる事実証を基に知っていたんだ。実際に最初は素直に魂を器に入れたらしい。でも、その時その事に気付いて、慌ててこういう手段を計画に差し込んだのだろう。君は結局歴代皇帝の身体の記憶を引き継がなかったから、杞憂に終わったみたいけどね』

歴代イルドゥー工皇帝の体に魂を押しこみ、軀の記憶を引き継がせようとした。

経験と、恐らく攻撃に対する耐性を引き継がせようとした。

だが、彼らの目論見は失敗に終わった。その事は俺が一番知っている。それを引き継がなかった事を知っている。

——ざまあみろ。

そんな言葉が脳裏を過った。

結局、俺が無駄に死の苦しみを何度も味わったという事実は揺らがなかったが、これくらいは言ってやらねば気が済まない。

『ともかく、いきなり別の精神が軀に入ってくれば、隙が出来る。対魔族に特化したその者達はたちまちその隙を突いて君を殺しにかかった。どうせなら歴代皇帝を滅ぼしておきたいと思ったんだろうね。そして彼らはイルドゥーエ皇帝を殺した。でも軀と十分に癒着していなかった君の魂は、軀の死につられることがなかった。つられたのはイルドゥーエ皇帝個人の魂。君は死の苦しみを味わうだけで、魂が消滅することはなかった』

まるで歴代皇帝の魂が俺の身代わりになったかのような状況だな……。俺の魂が邪魔をしなければ、彼らは生き残ったのだろうか。

『引き継いだか引き継いでいないか、それを確認する術は君の意識が覚醒すること以外になかったから、彼らはその方法を取り続けた。そうして出来上がった、あるいは、壊れていった君の魂を、ついに器に入れたのが十八年前のこと』

魔族を滅ぼす為の魔族が完成した日。

『だが、唯一、最後の最後に、そこまで完璧だったアテム王国が予想だになかった出来事が起こった。君が器に入れられ、覚醒した瞬間、君は赤子のまま何らかの手段を講じてアテム王国から逃げ出した』

……。

俺の記憶の中にそんな出来事は無い。

『これは僕の予想だけど、歴代イルドゥーエ皇帝の魂の残滓が君の魂にほんの少し付着していたのかもしれない。覚醒した瞬間、それまで君が入れられてきた歴代イルドゥーエ皇帝の魂の残滓も同時に覚醒し、君を助ける為に器を借りて策を講じた。もちろん、これは僕の憶測、希望といてもいい。ここまで詳しく知っていながら、その最後の出来事を僕が知らないのは、そこでアテム現王にアテム王城への侵入が発覚して追われる身になったからだ。情報を得るために、あまり君には言いたくない方法をとっていたから詳しくは言えないけど、これは確かな情報だよ』

……。

『最後の出来事を詳しく知りたいなら、アテム現王に直接聞くのが一番手っ取り早い。でも、僕はそれを君に望まない。君はアテム現王に追われている。僕達の大切な家族が危険に晒されるのは本望じゃない。だから、あえて君に復讐を頼んだりもしない。でも、ここからそれを決めるのは君自身だ。君がやりたいようにやるといい最後に纏めよう——』

君は——初代イルドゥーエ皇帝の軀を持ち、歴代イルドゥーエ皇帝の魂に触れ、最後のイルドゥーエ皇帝アルフレッド・サターナに育てられた魔人族だ。

『もしこれを見ても、君はイルドゥーエに戻ってきてはいけない。アテム現王に見つかってしまったからには、きっとイルドゥーエはアテム王国に襲撃されているだろう。でも、僕達だってただで滅ぼ

されはしない。僕達が一番恐れているのは、君がイルドゥーエに戻ってきてアテム王国に連れ去られることだ。君は僕達の光で、生きる意味で、守るべき家族なのだから。君が歴代皇帝の遺児だからというわけではないよ。たとえ君が純人族の子どもだったとしても、サレがサレであることに違いはない。君は君だ。君こそが僕達の家
族——」

「なんだよ…… そんな大事なこと…… 今更言いやがって——」

『最後に現実的な話をしておこう。もし僕達が皆アテム王国に殺されていたら、結果的にアテム王の悲願は虚しくもおおよそ叶ったことになる。僕達がいなくなってしまうえば、魔族は君だけになるからね。アテム王が君をどうしようと思っているか、二つの予想が建てられる。一つ、君が唯一の魔族として強大な力を秘めていることに変わりはない。君を別の目的で軍事利用しようとするかもしれない。もう一つ、最後の魔族である君を異分子と認めて、抹殺しに来るかもしれない。さっきも言った通り、君がどうするかは君次第だ。君は最後の魔族として、独善的根拠に基づいてでも、好きなように行動していいんだ。僕達の仇を取る必要もない。——君との日々はとても楽しくて、幸せだったよ。それじゃあ、気を付けて。行つてらっしゃい、サレ』

紙に涙が落ちて、斑点を描いて行く。血の涙ではなく、透明な雫が。

全ての説明を聞いて、俺は様々な疑問に答えを見出していた。

唐突に何度も死に直面した理由。

俺の精神は歴代イルドゥーエ皇帝の体に入れられ、その度に殺されたから。

尻尾が生えた理由。

俺の軀は初代イルドゥーエ皇帝という古の魔人族の軀だから。

アルフレッド達が急に訓練を始めた理由。

俺のために、アテム王城に侵入しようとしていたから。

アルフレッドやリリアンが俺を旅に出るように促した理由。
アテム現王がイルドゥーエを襲撃すると予想していたから。

皆が俺を守ろうとした理由。

俺を――

【その軀はお前にくれてやる。軀の方も、お前の魂に感応して独自の变化を遂げているようだしな。それは既にお前のモノだ。体も魂も、お前本来のモノだと思って良い。私に気兼ねする必要はない。好きなように生きる――私の息子よ】

【なんとか彼らを出し抜くことが出来ましたね。これで私達の最後の望みは全うされました。あとは貴方次第――いずれ会うその時まで、健やかに――私の息子】

【アテムとの戦いの最後の最後で俺の軀に入ってきたのはお前か。邪魔されたのは頭にきたが、それがお前の意志ではなかったんなら仕方ねえ、今回は許してやる。どうせなら当分こっちは来るなよ。今こっちに來られるとお前を殴っちまいそうだ。……まあ、元気でな――俺の息子】

【貴様は我の遺児であること、そして魔人族であることを誇りに思うが良い。優雅に生きよ——我が息子】

軀の底から、様々な声が響いてきて——

【申し訳ありません。全ての家族を守ることが、僕には出来ませんでした】

【最後のイルドゥーエ皇帝よ、お前が気に病むことではない。お前はイルドゥーエ皇帝としてできる限りを遂行した。たった一人の私達の息子を守ったのだから】

【私達も初代様と同じ心持ですよ、アルフレッド】

【有り難う御座います、初代様、歴代様】

【私たちは先に行く。——さらばだ、息子よ】

軀の中から、確かに在った何かが抜けだして行く感触が湧き出て

【僕達はサレの心の中にいるよ。もうここにはいられないけど、君が覚えていてくれれば、僕達は君の中で生き続ける。でも、それに縛られなくて良いんだ。好きなように生きてくれることが、僕達の望み。元気で——僕達の息子、サレ】

「アルフレッド……！」

最後に一つだけ、何かが残っていて——

【行ってらっしゃい、サレ】

「リリアン……！！」

最後に残った何かも消えて――

抜けだして行く何かは涙^{なみだ}に姿を変えて、地面に吸い込まれて行った。

俺はそれを救い上げる事も、止める事も出来なくて。

生まれたばかりの赤子のように、無様にも泣きじゃくった。

好きなように生きる。

仄かな独善性を含んだ優しい言葉が、いつまでも心に残っていた。

5話 「生痕」(後書き)

長いプロローグのようでしたね。お付き合いくださってありがとうございます。

6話 「出逢」

「……行くか」

そして俺は一人になった。

イルドゥーエは崩壊した。正確には俺がグラム・イストラ殲滅で壊したんだが。もうここに残る意味はない。俺は『出発』することを望まれた。皆に。だから行こう。アテム王国へ。

この短い時間に色々あったけれど、俺の気分は晴れやかだった。

俺の旅の最初の目的地がアテム王国だったことは、おそらくアルフレッドの策略だろう。アルフレッド自身は俺にアテムへ行って欲しくないと言っていた。アテム現王はたぶん俺を探している。おそらく、この十八年間見つからなかったことが奇跡とまで思えてくる程に血眼で。もしくは――

俺は森で二度感じた視線を思い出し、もしかしたら既に監視されているのかもしれない、という考えも抱いた。……今は置いておくか。

口と文面ではアテムへ行って欲しくないと言っていたが、アルフレッドは俺がアテムへ行くことを予想していたのだろう。

「どこまでも手回しが良いなあ」

――感嘆に値するよ、アルフレッド。
そつ心の中で呟いた。

さて、アテムへ向かうにしても明確な目的もないままぶらぶらするのは避けたいところだ。宙に浮いた状態では気が抜けてアテム王に見つかってしまうかもしれない。容姿に関しては、どこか異質に見えるかもしれないけど一応純人と同等だと言う。ただ歩いているだけでは特に障害もないと踏んでいる。

もちろん、無駄に目立つ事は避けたいけどね。

——ふーむ…… アテム王には会いたくないなあ。いや、会いたい気もするなあ。

俺が生まれた原因の一つとして歴代のアテム王が関わっていたことは解るから、実は一目くらい見ておきたいという気持ちもある。でも捕まると面倒だよな。実際アテム王国つてのがどんなものなのかも解らないのに。

そんな事を考えながら歩いていると、いつのまにか先程見た大樹の傍に辿りついていた。

ここから先がアテム王国とイルドゥーエの旧共同保有地らしい。あくまで形式上の。今はその辺が曖昧になっていると聞かされていた。

さらに進めば正式なアテム王国領だ。

——よし、ともかく、アテム王国がどんな国なのか、純人族はどんな風に暮らしているのか。単純なことだけどアテム王国で何泊かして観察しよう。

そうすればまた別の目的が見つかるかもしれない。

そうして俺はゆっくりとその境界線上を跨いだ。

共同領地の先はまだ森で、そこからさらに歩き続けると今度は開けた平原に出た。

アテムとイルドゥーエという異質な両国の共同保有地であるためか、村落などは見当たらない。ただただ背の低い草が一面に生えているだけだ。

——何もないわ……

こんなただっ広い草原を歩くのも気が引けるなあ。と思つた所で、結局進むしか道はない。方角機が西を指している限り、方向感覚が狂うということはないだろう。

ちなみに方角機は荷物の中に入っていた。他にも色々と役に立ちそうなものが沢山。

——ともかく、まずは街を探そう。

一旦どこかで腰を落着けたい。
そう思って、俺は再び足に力を入れ、走りだした。

その後、結局俺は三日程走り続けた。

三日。三日だよ！？ 全然街なんかねえよ！ くそっ、騙された気分だ！

猛スピードで走っていたら、いつの間にアテム領の国境線を踏破してました。気付いたのは昨日のことです。

正直眠い。一刻も早く寝たい。

「ゼエ……ハア……く、くそっ……調子に乗って走り過ぎた……」

アテム領に入ってからいくつか村や町は見たが、どれも辺境の村落って感じで十分な宿泊施設はなかった。その時は『まだ走れそうだから次の街まで行ってみよう！』なんて意気揚々と飛ばしていたけど……まさか王都まで連続的に走らされるとは思わなんだ。

——広すぎるんだよ！　こんなに広い領地管理しきれねえだろ！　馬鹿っ！

今更アテム王をぶん殴りたい気分になった。

今現在はアテム王国の王都ソレイユの関所。国境線ではなく、アテム王国の中心であるソレイユに関所が設けられている。まあ、あれだけ広いし国境線に関所をもつけるのも骨が折れるのだろう。

俺以外にも入都希望者はたくさんいて、適当に列に並びながら自分の順番を待っていた。

「お次の方ー」

ようやく順番が回ってきた。二つある受付の片側に呼ばれて、歩を進めた。受付をしているのは女性だった。眼鏡をかけて事務処理

に励んでいる姿はいかにも、といった感じた。

「アテム王国王都ソレイユへはどういった御用件で？」

成る程、そういう所から会話を始めるのか。
無難な答えを意識しつつ、俺は口を開いた。

「——観光です」

「観光ですね。解りました。それでは身分証の方をお出してください」

……。

しまったあああああ！ 俺身分証なんて持ってねえよおおお
おお！

もたもたしていると、受付の女の人が不思議そうな顔で小首を傾
げた。

どうする、俺。

「あ、あのですね、ちょっと待って頂けますか？」

「構いませんよ」

焦ってる感じを前面に押し出しつつ、俺は背の荷物を降ろして中
を弄った。もはや体裁など繕っていられるか。

用意周到なアルフレッドのことだ、身分証も荷物の中に入ってる
んじゃないだろうか。

—— あった。はあ……良かったー。

とりあえず自分の名前が書いてあった紙きれを取りだして、受付

の人に見せた。

「《サレ・サターナ》様ですね。所属はイルドゥーエ王国——イルドゥーエ王国？」

うわぁ！

俺は速攻で受け付けの女の人が訝しげな顔で見ていた紙きれを奪う様に取って、必死で笑顔を取りつくるった。

「あ、あはは、間違えましたー。すいませんねー、冗談で作ったものでして……今本物を渡しますねー」

ふとその紙きれの裏を見ると、うすーい文字で、

『これ、僕が考えた悪戯なんだけど面白い？ 騙されてくれるかなあ。あ、ちゃんと所属を偽ってある対外用の身分証もあるから関所とかではそっちを使ってね』

騙されたよちくしょう！ こんな危なっかしい悪戯するなよ！
馬鹿っ！

俺はもう一度荷物の中を弄って、ようやくそれらしき紙きれを見つけた。

「所属はアテム領パラシアスですね。受理しました。どうぞご観光をお楽しみください」

ようやく関所を通された。

大きなため息をついてふと周りを見ると、俺の背中側にあるもう

一つの受付所で俺同様もたついている人がいた。

同じ匂いがします。あれは世間知らずの匂いだ。

フルアーマーのがつちがちの鎧と、フルフェイスの兜が異様に目立つ。兜の頭頂部から鳥の羽らしきものが一本垂れ下がっていて、身動きをするごとに鎧がガツチャガツチャと鳴り響き、兜の羽がひらひらと宙を舞っていた。

——頑張れ！ 俺は同志として応援しているぞ！

心の中で、同じ匂いがするその人に声援を投げ掛け、俺は正面に向き直った。

そこにはアテム王国の王都^{ソレイユ}が悠然と横たわっていた。

とにかく活気がすごい。見た事もないような食べ物売ってる露店や、道の真ん中で大衆を相手に芸を披露している道化風の人がいったり、親子連れからイチャイチャが眩しい男女まで、とにかく色々な人が道を闊歩している。辺りからは楽しそうな話し声が聞こえ、イルドゥーエに籠っていた俺にとっては新鮮な光景だった。

ゴシック様式の建物が多く建ち並んでいて、不思議な光景でもあった。なんとというか、幻想的な気分にはさせられる。

王都の奥の方には威厳をたたえているアテム王城。でけえ。とにかくでけえ。サンクトウス城よりもでけえ。

人の数がこれだけいれば、規模としては確かに大きくなるのだろう。

アテム王城は高い塀の様な城壁で遮られているが、その城壁以上に城本体が天高く伸びている為、景観は損なわれていない。

「ほあー、すごいなあ」

素直に感嘆する。

「ほあー……でも眠い……」

同時に、間抜けな声と共に欠伸が漏れた。さすがに疲れが溜まってるしな……

王都の散策は明日にしよう。

そう思っ受付嬢に手渡された観光冊子を開いて、適当な宿を探した。

遠くまで行くのも面倒なので、近場の宿にとりあえず一泊の予定で部屋を取った。

——関所でもそうだったが、宿の主人も俺を見て特に変わった反応はしなかったな。

やっぱり外見だけなら純人族と大差ないらしい。不安がなかった訳じゃないだけに、少し嬉しかった。アルフレッド曰く、『確かに魔族の容姿は超俗的だけど、純人族にも似たような容姿の人はいる。だから、傍から見たくらいじゃ魔族って確証は得られないだろう。なにぶん、純人族は数が多いからね』らしい。紙一重だと思うのは俺だけだろうか。

小さな宿の二階に上がって、鍵と同じ番号の部屋を見つけて入ろうとした所で、思わぬ人物に出会ったのはそんなことを考えている時だった。

階段の下の方からガツチャガツチャとどこかで聞いた重い金属音が聞こえる。

——はて、どこかで……

部屋に入る前に少し待って、その人物を確かめるために階段の上から顔を出してみた。

——ああ、あの人か。

さつき関所で同じ匂いを感じ取った全身鎧兜の人だった。ここにいるということは関所を越えられたらしい。ふむふむ、良かった良かった。

その人が階段を上がってきて、丁度視線が交差した。

フルフェイスの兜の中からほんの少しだけ瞳が見える。こうして見てみると、無骨な格好の割にそこまで背は高くない。遠くから見ると解らないけど、近くで見れば高さの違いが意外に目立った。

今の所、赤の他人であることは確かなので、俺は少しだけ会釈をして自分の部屋に入った。

こんなことを思いながら、その実、明確な繋がりは持ちたくなかった。

俺は人と関わることに少しだけ恐怖を抱いていた。独善的でいらなくなりそうだから。繋がりが消えてしまうのは怖いから。

その日は部屋に入るや否や、簡素なベッドに飛び込んで泥のように睡眠を貪った。

寝ないで三日間走り続けたんだよ？　我ながらおっかねえ体力と精神力だぜ……

次の日、目が覚めたら『大変な事』になってました。

——なんか顎の下あたりにさらさらした感触がある。布団？
いや布団掛けてないし……

目を瞑りながら心の中で言う。
得体の知れない何か。ぶっちゃけると目を開けるのが怖いです。
何故かって？

よくよく俺の横にいる何かを手で触って確認していたら、それが
人型だつてことが確認されました。

これ、あれだ。絶対髪の毛。
よし、落ち着け、俺。

俺に夢遊病の兆候は見られないぞ。俺じゃない。俺からじゃない。
信じるんだ。信じればそれが真実になる！……んなわけあるか！

安っぽいつつこみを自分に向けて放つ。

いやあ、それにしてもどうしたもんよ、これ。

俺、いざという時自分を庇いきれる自信がありません。

——だから落ち着けと。

一人でわざとらしく深呼吸をしていると、不意に腕の中の何か……
いや、『誰か』が身動きをした。

俺に残された時間はあまり無いようだ。

そして俺は、意を決して目を開けた。

最初に窓から差し込む朝日が映って、次に明度に慣れた目を自分の腕の中に向ける。

ごたいめー……

「ひいひい！」

その日の朝、安宿に俺の頼りない悲鳴が響いた。

「あの………すみません………起きてください………」

繋がりをもちたくないという俺の願いは、一日も経たずに崩壊した。

腕の中にいた誰か。

さらっさらの銀色の髪を長く伸ばした女の人でした。
下着姿でした。

興奮？　しないしない。すっごい美人だけどそれどころじゃない。
はは、混乱し過ぎると逆に冷静になるもんだね……

とりあえず起こそう。

起こさないことには身動きが取れない。俺の腕は彼女の枕と化している。

それにしても、見れば見るほど美人だ。

銀色の髪は一度は撫でたいと思う程にさらさらで、きめ細やかで張りのある白い肌。長いまつ毛に少しつり目気味の目尻と整った肩細長い四肢はどこか頼りなさげで、しかし、守ってやりたいという保護欲が駆り立てられそうな儚さを表しているような気がした。

体つきは細いが、ただ単に細いというよりは締まっている感じ。

——いやまて、何を冷静に観察している。

「ん……」

やべえ。自分から起こしたはいいが、また焦ってきた。色々弁解の言葉が頭を過るが、どれも説得力に欠ける。というかなんで俺が弁解しなきゃいけないんだ。ここは俺の部屋だ。間違いない。部屋番も合っている。

ともかく尻尾を隠そう。

寝る時くらい楽にさせようと思って、昨日寝る前に尻尾を服の外に出しておいた。

普段外に居る時は腰にぐるぐる巻いて服の外に出ないように隠している。尻尾とか完全に普通の人じゃないもんね。

「んあ……」

と思つて尻尾を隠そうと思つたら、この人に思いつきり掴まれました。

え？ 起きてないよね？ なんで尻尾をピンポイントで掴んだの？ 寝相とかそういうレベルじゃないよね？

「いでででで！」

いきなりの事で俺は憚りも無く悲鳴を上げてしまった。尻尾を握られるとかなり痛いんだよね。というか女の癖に結構握力あるなおい！ 千切れる！ 自慢の尻尾千切れるから！

「んあ？」

お、お目覚めなすった。

助かった……のか？

尻尾に掛けられていた圧力が緩んで、俺は大きく深呼吸をしながら安堵した。

「……あ、どうも、おはようございます」

とりあえず挨拶しておいた。フハハ、礼儀は大事だ。——心の
中の高笑いにも勢いが無いのは仕方ないことだと思う。

「……ん？……おはようございます」

彼女が身を起こして、眠気眼を擦りながら呆けたように返してきた。うーん、早く現状を認識して欲しいような、欲しくないような
それから視線だけを交わす時間が数分あった。髪と同じ銀色の瞳
がすごく綺麗だ——

「え？」

ついに彼女が現状を認識したようだった。その銀色の長髪を左右
に振り回しながら、周囲に目を配っている。

「あ、あれ？　ここ私の部屋じゃないのか？」

「誠に残念ながら、仰る通りです。ここ、俺の部屋なんです」

もうちょっと気の利いた告げ方はなかったものか。俺にはこれが
限界でした。

そんなことを言うと、次に彼女は自分の格好に気が付いて——

みるみるうちにその顔が真っ赤っかになっていった。

胸を両手で隠す様な仕草を見せて、ベッドから飛び下りる彼女。

「す、すまない！ 申し訳ない！ ごめんなさい！ すいません！」

凄まじい速さで何回も謝られて。

彼女は小さな悲鳴を上げながら部屋を出て行った。

言わせてくれ。

——何だっただんだ一体……

荷物の中からタオルを取りだして、水に浸してから身体を拭いた。とりあえず身支度も終わり、疲労も回復したことだし、部屋を引き払って王都ソレイユを散策しようかなあ。

朝の出来事については保留しておいた。良く解らないし、もう考えるだけ無駄な気がする。きっと夢だった。夢だったのだ。

さあ、外へ出よう。

扉の取っ手に手を掛けて回す。

部屋を出た瞬間に、視界いっぱい昨日見た鎧兜の人が映りました。

「……え？」

俺なんか悪いことした？ もしかして朝叫び声を上げたのが悪かった？ 謝った方がいいかな……ソレイユにきて早々に人間関係を悪化させたとあつては俺を育ててくれたアルフレッド達に悪い気

がしてきた。

「あの……とりあえず俺謝った方がいいですか？」

「い、いや！ 謝るのは私の方だ！」

フルフェイスの兜のせい、物凄く籠った声が返ってきた。
って、この声――

「あれ、さっきの――」

「そ、そうだ…… その……勝手に部屋に入ってしまい申し訳なかった。……私は寝てて解らないのだが、その……なんというか……『粗相』は無かっただろうか……」

最後の単語に並々ならぬ様々な意味が含まれているように感じた。
とりあえず彼女を安心させるように言っておこう。

「ありませんでしたよ。もう過ぎた事ですから気にしないでください」

ぎこちない微笑を送っていた。

完ぺきな受け答えだと自負していたのだが、彼女はフルアーマーをもじもじさせて黙り込んでしまった。絵的にはシユールだったが、どうにも笑う気にはなれません。

――俺、何か間違えた？

もう限界。居た堪れなさに耐えられそうにありません。

「そ、それじゃ！」

「あっ」

短い別れの言葉を残して、俺は階段を駆け下りてそのままの勢いで宿を出た。彼女が何か言いたげだったけど、それを待っていたら俺の精神は参ってしまいそう。

—— あー。そういえば家族以外の女の人とまともに話したのって初めだったなあ。

なんて感慨に耽りながら俺は王都を駆け抜けた。

7話 「種族」

——今現在、俺は自分がどこを走っているのか全く解らなかった。でたために王都を走り抜けてた為です。

何故かと言えば……さっきの鎧兜の人がガツチャガツチャ鎧を鳴らしながらおっかけて来るからです。

ちよつと！　なんでおっかけて来るんだよ！

追われるとなんか逃げたくなる。

中身があの人なんだって解つてても、今の彼女は鎧兜に包まれてて重厚な威圧感を醸し出しているからすごく怖いんだよね。いやホント。

——こええ……

王都の住人達からの視線を存分に浴びながら、俺は全速力で住居区らしき場所の裏路地まで駆け込んだ。

「もう追つてこないよな……」

割と本気で走ったからさすがに引き離せただろう。

——あーもう、王都に入ってまだ一日しか経ってないのに面倒事に巻き込まれるなんて……

住居を囲っている塀に背を預けながら、一息ついた。

少ししてから周りを見て彼女がいなかったことを確認する。
よし、いないな。やっと平穩が戻って――

「てめえ！ 待てよ！」

近くから男の怒号が聞こえてきた。裏路地ということもあってか、人影は見えない。

ふと気付いて自分が通ってきた住居と住居の間の真っ暗な通路に視線を運ばせた。

『彼女』が数人の男に囲まれていた。

極力気配を消して、咄嗟に物陰に隠れる。

なんだか知らんが……ちょっと面白そうだ。

「人にぶつかつたとして謝罪の一つもなしってのはどういっつ見だ？

ええ、おい」

「そうか、すまない」

彼女が頭を下げた。

すると、彼女を取り囲んでいる男たちのうちの一人が、

「ああ？ 女か？」

と目を丸めながら言った。兜の下から聞こえたくぐもった声だが、確かに声は女であると誰もが思っただろう。力強いけど、さすがに音程が高い。

すると、男の顔がみるみるうちに厭らしい笑みに変わって行く。

「——ならよお、その鎧脱げよ。俺のお目がねにかなえば許してやる」

「非はこちらにあるが、なぜ少々ぶつただけで貴方の命令に従わねばならないのだ」

——結構気が強いな。意外だ。

「少々？ その鎧の所為で俺の肩が取れちまったんだよ。解つてんのか？ お前に選択権なんかねえんだよ」

お、すごく悪役っぽい。アルフレッドの部屋にもこんな悪役が出てくる本があつたなあ、としみじみ考えていたら、彼女が鎧を脱ぎ始めた。

鎧の中から男装チックな服装の美女の姿が現れた。長い銀色の髪はシニヨン風に纏められていて、凛々しさが感じられる。

「これでいいだろう。私は用があるんだ、これで失礼する」

彼女はそのまま踵を返したが、俺の目からは彼らがどういう行動を起こしたか丸見えだった。

下卑た笑みを浮かべて後ろから彼女に襲いかかり——

「なっ、何をする！」

「気が変わったんだよ、お前は俺に治療費を払うまで俺の奴隷にしてやる」

——ベタだ。

でも実際に目の前で起こっている。

彼女は男たちに羽交い絞めにされ、地面に倒されたばたと手足を必死で動かしている。

——俺はどうするべきか。いや、どうしたいかで物を考えよう。

はあ……俺こういう厄介事に巻き込まれる体質なのかなあ。

どうしても嘆息が漏れてしまう。が、同じ世間知らずな感じの彼女を放っておくのも気が引けて。

「なあ、おい。男三人で女を羽交い絞めにするってのもなかなか嘆かわしい絵なんだぞ」

俺は虚しさを心に秘めながら、物陰から飛び出していた。

「あつ」

「やあ、よくここまで追ってこれたね」

彼女が驚いたような声を上げたので、適当に反応を返しておいた。

「なんだ？ てめえ。……ん？ 女か？」

「失敬な！俺は男だ！」

「まあいい。どうせ見られちまったんならそいつも連れて行くかなかなか質はよさそうだしな」

おいだから男！俺男だから！いつまで勘違いしてやがる……もっと近くで見れば気付くはずだ。彼女は最初から気付いていたようだし。髪に隠れて解りづらいのかな。いっそのこと近くによつ

てよく顔を見せてやろうか……

「おい、お前等、そいつも捕まえておけ。顔はキズものにするなよ」

リーダー格っぽい男が二人の男に言った。

おいおい、待ってくれよ。今どうやって俺が男であるかを知らしめようか真剣に考えてるんだから！

「わ、私の事はいいから！ 逃げる！」

彼女がそんなことを言う。

「いやあ、逃げるのはもう飽きたんだよね。君に散々追い掛けられたし」

笑って返した。事実だし。

そんな中、彼女をリーダー格に任せた男二人が小走りにこちらに歩み寄ってきた。

指をばきばき慣らしながら威嚇してくる。

——言わせてもらえばね…… それ無駄な仕草だから…… 俺、アルフレッドとの訓練の時にそれやってその隙を突かれて半月板パリンしたから。

とはいえ、彼に俺と同じ運命を辿らせるのもなんだか悪い気がするなあ。恥ずかしさと痛みに悶える姿はなかなか見ものだとは思うけど、経験者としては些か気が引ける。絵図を予想したら可哀想になった。

すると、二人は懷から短剣を一本ずつ取り出し、片手に持って構えてみせた。一応警戒はしているらしい。俺の左腰に括りつけられ

ている剣の鞘に気付いたのだろうか。マントで隠れて見えづらいが、注視すれば凹凸に気付かないでもない。気付くということはそれなりに場馴れしているのかな。

あちらが得物を使ってくるなら、と俺は俺でマントを翻し、剣鞘に手を掛け、柄を握って抜剣する。

宝石ばりの輝きと、造形美という言葉をそのまま形にしたかのような様相を呈した『宝剣ジュワイユーズ』。刀身は比較的長い方だ。また、柄も両手で握めるように十分な幅が取っている。素材だけ見れば随分と煌びやかで装飾的な一品だが、その実、素材を無視すればこの宝剣は意外と機能性を重視したものだろうと理解できる。長年の訓練で様々な武器を扱ったが、ここまでしつくりと来る剣はなかった。装飾に関してはきつと初代皇帝か歴代皇帝が派手好きだったのだろう。

ともかく、俺は黒地の柄を両手で握り、正眼に構えた。

「随分な代物を持ってるじゃねえか。こりゃぁいい。どこぞのお嬢様か何か？」

「いやだから俺女じゃな——」

言い切る前に一本の短剣が迫って来ていた。

ほう、良い度胸だ。せっかく男だと教えてやろうと思ったのに。そうまでして俺の発言を止めるか。

—— よろしい、ならば…… お前達にはどこぞのお嬢様にぼっこぼこにされた悪党（笑）という不名誉な地位を与えてくれよう！
フハ、フハハハ。

先に攻撃を仕掛けて来た男は俺が宝剣を持っている腕に狙いを定めて、短剣を振り抜いて来る。速度はそこまで脅威ではない。見てからでも避けられる水準だ。

俺は短剣を半身になって避けて、すぐさま宝剣を上段に振りかぶった。

そして、突きだされた短剣目がけて振り下ろす。
凄まじい風切り音を鳴らしながら、宝剣が短剣の刃を真つ二つに
切断した。まるで抵抗などなかった。

——いやあ、ホントこの宝剣切れ味半端ない。

短剣の刃が宙に舞う。

大きく目を丸めて後ずさる男をよそに、俺は次の攻撃に備えた。
もう一人が男の陰から飛び出して、突貫してくる。

先程と同じようにつきだされる短剣。
前の男の二の舞にしてやった。

男二人は刃が欠けた短剣を握りしめながら、間合いをとってこちらを凝視してくる。

「もういいだろう……」

出来ればもう向かってきてほしくないな。そう思いながら言葉を紡いだ。

「……くそ、引き上げるぞ」

俺の願いが通じたのか否かはおいて、彼女を拘束していたリーダー格の男が交戦の一部始終を見た後にそう呟いた。

丸いかどうかともかく、どうにか収まったらしい。

リーダー格の男が彼女の拘束を解いて、男二人を引き連れながら走り去って行く。

取り残された俺と美人さん。

「……」

気まずい雰囲気になってしまいました。

「た、助けてくれてありがとう……」

「あ、いえいえ、どういたしまして……」

美人さんが服の汚れを掃いながら礼を言ってきた。

彼女は終始どこことなく訝しげな視線を向けてきたが、俺は意識的にその視線を取り計らわなかった。

少し沈黙が痛い。

「そういえば、なんで俺の事追っかけて来たの？」

俺は宝剣を鞘にしまいながら、咄嗟に話題を提示した。

「貴方に聞きたいことがあった」

「ん？」

「名前を……聞かせてほしい」

……それだけ？

「先に言っておこう。私の名前は《シオニー・シムンシアル》」

まあ、名前だけなら別にいいか。

「俺の名前は《サレ・サターナ》」

「ありがとう。——サレ、と呼ばせてもらってもいいだろうか」

「構わないよ」

「私の事もシオニーと呼んでくれ」

「合点承知」

よし、彼女の目的はこれで完了した筈だ。微妙に繋がりをもってしまったのは仕方ないとして、これ以上彼女と関わると変に仲良くなってしまうそうだったので、俺は早々に別れの言葉を言おうとした。

「もう一つ聞きたいことがあるんだ、サレ」

遮られる。

「今更になって思い出したんだが……君、尻尾ついてなかった？」

……。

俺は人生最大の失敗を既に犯していたようだ。……うん。

「ハハハ、な、何を仰る。尻尾がついている人なんていませんヨ」

所々声が裏返ってしまった。

……。

……。

これ、どうするよ。

とりあえず逃げるべきか？

いや、逃げてもまた追いつけられるかもしれない。

「ちょっと——」

なんて顎に手を置いて考えていたら、いつの間にか彼女が俺の後ろに回り込んでいて——

「失礼するよ」

「え？ ちょっと、ひゃあん！」

服の中に手を突っ込まれて変な声が出ました。

「あ、やっぱり」

服の中で腰に巻いていた尻尾をがっしりと掴まれて、外に引きずり出される。

「ま、待て！ 待ってくれ！ いでで！ そんなに強く握らないで！」

「あつ、す、すまない」

謝るくらいならそんな大胆な事をしないでください。

彼女が俺の尻尾を放したので、俺は感覚を確かめるようにその場で何度か尻尾を振った。

ふう、千切れてはいないらしい。この尻尾すごく便利なんだけどある意味弱点なんだよね。強く握られるとかなり痛む。

「やっぱり尻尾だよな……」

「……はい」

もう隠せない。だって掴まれたもん。しかも痛がっちゃったし。新手のアクセサリーです！　とかも無理そうだ。

「君、純人族じゃないよね？」
「……」

やべえ、質問がどんどん鋭利になっていく。俺のガラスの心が今にも割れてしまいそうだ。

「もしかして獣人族？」
「そう！　それ！」

よし！　これで勝った！　わざわざ答えを提示するとはとんだ間抜けめ！

「残念、アテム王国は純人至高主義だから純人族以外がソレイユに
いることはないよ。関所でバレて入国拒否が関の山だからね」
「なん……だと……」

謀りおったぞこやつ！　誘導に頭から突っ込んでいった間抜けは俺の方でした。

世間知らず仲間だと思ったら意外と色々知ってるし……　心配して損した。

「まあ……　今回はこれ以上追及せずにおこう。助けてもらったことだし。でも私はこれからアテム王国の王宮騎士団に入隊するから、君が異種族ならアテム王国の理念に従って君を密入国者として捕まえなければならぬ」

嬉々とした表情でそんなことを言うシオニー。

「だからあんな重そうな鎧つけてたの？ 逆に動きづらくない？」

聞くなら今しかないと思った。一方的に質問に答えるのも不公平だろう。

「アテム王宮騎士団に士官した時に上司にそう言われて。私もそう思うのだが上司は上司だ。聞かない訳にもいかないだろう」

苦勞してるのね。

俺の中では今更になって純人至高主義という言葉が引っかかってた。排他的だなあ。アテム王国の国風は俺に合いそうにないと思った。

「というわけで、もう見つからないようにね。次に会った時は私は君を捕まえなければならぬから」

「肝に銘じておきます……」

「それじゃあ私は失礼するよ。おっかけ回してすまなかった」

「あ、お気を付けてー」

踵を返したシオニーに向けて、俺は手揉みをしながらそう告げておいた。

できれば次も見逃してくれないかなあ、なんて思いながら――

8話 「侵入」

はて、どうしたものか。

ソレイユを観察してみた方がいいが、特に新しい発見もない。宙ぶらりのままだ。

真夜中の王都ソレイユを闊歩しながら、思案に耽った。

人々は皆樂しげな顔で王都に住んでいる。俺が予想していたアテム王国とはえらい違いだ。結局の所、魔族生成は王国の暗部で、民はそのことを知らないのだろうか。当然と言えば当然か。

「うーん……」

駄目だ、このままだとだらけてしまいそうで。イルドウィーエを飛び出した方がいいが、どうにも目標が定まらない。

……。

「よし、アテム王に会いに行くか」

少しの好奇心。俺を作ったアテム王国への好奇心だ。アルフレツドの話を聞いてから、気になってはいた。だから、その好奇心を手土産に一度その顔を拝みに行こう。無為にソレイユで時間を潰すよりは幾分マシだと思えてきた。

問題はどうやってアテム王に会うか。

見たところアテム王城の警備は厳重だし、忍び込むのは厳しそう。あっちが俺の事を探しているのなら、案外わざと捕まった方が早いかもしれない。

でもどうせなら対等な立場で言葉を交わしたいとも思う。捕まったら最後、みたいなのは勘弁願いたい。

飯にもアルフレッドたちを全滅させるだけの力が彼らにはあると踏んだ方がいいか。

あー、でも下手打って死にたくないなあ。

呆けた面でそんなことを考えながら、俺は結局今日の朝引き払ったばかりの宿に戻ってきてしまった。

なんだかんだで居心地が良かった。ただ、シオニーがまだこの宿に部屋をとっていると困った事態になる。

俺は恐る恐る宿の亭主にシオニーがいるかどうか聞いた。

「あの……鎧をガツチャガツチャさせてる人ってもう出て行きました？」

明確だろう。我ながら素晴らしい形容だと思う。

「ああ、あの人なら今朝がた部屋を引き払っていったよ」

割と簡単に教えてもらえた。よし、天運が俺に傾いている。これで心おきなくこの宿に泊まれそうだ。

その後、俺は昨日と同じ部屋を取って安っぽいベッドに腰を下ろした。

……。

はつきり言おう。この宿は呪われている。天運が傾いてるとか戯言でした。悪運が傾いてました。

俺がそろそろ寝ようかと思ってベッドの上に横たわったら、不意

に部屋の窓が割れた。

何を言っているか解らないだろうけど、とにかく盛大に割れた。鋭利なガラス片が飛んできて服にぶつかっていくけど、リリアン特製の服には傷一つ付かなかった。

え、これ何で出来るの？

リリアンが作った不思議旅服に驚いていると、今度は窓の外から誰かが入ってくるのを見た。

侵入者は窓から侵入すると同時に、ベッドの傍らで立ちすくんでいた俺に向かって強烈な蹴りを繰り出してくる。

「おおっと」

その足を手で払いのけ、咄嗟に身構える。

こんな真夜中になんだよ！ お隣さんに迷惑だろ！ 少しは時間帯考えろよ！

「お隣さんに迷惑だろ！」

頭に浮かんだいくつかの台詞のうち、重要そうなのだけ言ってみた。

「お前以外にこの宿に泊まっている客はいない」

「あ、さいですか……」

冷静に返された。く、悔しい。

「で、何しにきたわけ？」

少し語気を強めて問うが、

「……」

答えはない。それどころか、侵入者は再び窓に手をかけ、外に出ようとした。

逃がすものかと手を伸ばす。

が――

「あらっ？」

振り向きざまに投げつけられた投擲ナイフが俺の腕に刺さった。

「致死性毒と神経毒の複合薬が塗られている。お前は動けなくなり、じきに死ぬだろう」

俺はそんな決め台詞を聞きながら、ベッドに倒れ込んだ。一度は言ってみた台詞だ。

侵入者が窓から外へ逃げていく。

俺はその後ろ姿を眺めながら、ほんの少し口角をつり上げていた。

ちらちら侵入者のこと見てるのバレてないかな？

バレてないな。

よし、行った行った。馬鹿めっ！

俺は徐に立ち上がって腕に刺さったナイフを引きぬいた。

痛いには痛いけど、傷口は既に塞がりかけている。これは魔人族の回復力がなせるものだ。ちなみにアルフレッドは訓練中、俺にぶった切られた腕を数秒でくつつけたことがある。治癒系統の魔術すら使わずに。畏怖に値する光景だった……

個人差はあるものの、俺の身体も相当回復力に優れた身体だった。さすがに心臓や脳天を一突きされれば即死するけど。

毒？ いやいや、幼い頃からアルフレッドの木の实（毒）で鍛えられてきたこの身体は伊達じゃない。あんな慈愛に満ちた表情で『毒は抜いてあるから』とか言ってたけど、実はあれ全然毒抜きされてなかった。リリアンに無理やり喰わせられて気付いた。曰く、『いやあ、こういうのって気付かない内にやっついた方が楽でしょ？』。

—— 楽じゃないから！ 辛いから！

リリアンに無理やり木の实を喰わせられる時、アルフレッドがにやにやしながら解毒薬っぽい液体を持ってたからなんとなく気付いてましたけどね。当時赤子だった俺に手段はなかった。

そのおかげで、大体の毒に耐性がついたと言えよう。魔族が元から毒に強いってわけじゃない。この毒に対する耐性は後天的なものだ。アルフレッドって子育て白書（改訂版）を愛用してた割には随分おっかない事してきたんだよね。あの微笑に何度騙されたことか！

よし、侵入者は俺が動けないと思ってるに違いない。

亭主へのお詫びとして、一泊分の宿代に色をつけて部屋の机に置き、マントを羽織りながら侵入者と同じように窓から外へ抜け出た。微かに見える侵入者の後ろ姿を追いつける。

尾行の始まりだ。

これはかなり主観的な感覚に頼った推論だが——

—— たぶんあいつはアテム王の部下だと思う。

イルドウーエの森で背中に受けた視線もたぶんあいつだろう。似た感じがする。あくまで勘の域を出ないけど。

やっぱり俺はずっと監視されていたのかもしれない。魔人族に育てさせた方が効率が良いとか、そんなことを考えていたのだろうか。今になってそういう考えが生まれてきた。

この推論が正しければ、アテム王に対する一つの疑念が晴れる。

—— アテム王は俺を処分するつもりだ。

今更になって？ という疑問もあるけど……

たぶん、昨日今日あたりにアルフレッド達が死んだことを告げられたに違いない。俺の方が先にソレイユについていたなら、この時間差にも領ける。三日間走り続けた甲斐があった。なんで俺の居場所がバレたのかって疑問はあるけどこの際どうでもいい。よくよく思えばこの王都はアテム王国の心臓だ。情報網などいくらでもあるのだろう。

あの三日でさすがに追跡は引き剥がしたはずだが…… 暗殺者の方も丁度俺に追いついたのかな。

ともかく、それで、俺を監視させていた奴に急遽処分を命じた、とか。

森で投擲ナイフを投げたのは錬度を知る為だったのかもしれない。

—— それは墓穴だったな。

あれがなければ監視者が殺気を出す必要もなかったし、それによって俺に気付かれることもなかった。あのちょっかいがなければ俺もこつという考えには至らなかっただろう。

それにしても、いくら致死性の猛毒だからって死ぬ所を確認しなきゃだめだと思う。反撃を恐れたのかもしれないが、あいつは暗殺者としては三流と見た。殲眼が怖いのは解るけど、相對した瞬間にそれを使わなかったことに疑問を持てよ。

最後に少しだけ皮肉を込めて、それから俺は真剣に暗殺者の後ろ姿を追った。

幾許か王都を走っていると、暗殺者はついに新たな動きを見せた。きよろきよろと周りを見回して、誰もいないことを確認している。俺は家の屋根の上から遠目にそれを眺めていた。屋根から飛び出ている煙突の陰から半身だけ乗り出してその様子を觀察する。

——お、なんか家に入って行った。

アテム王城への抜け道か何かかな。
少し時間を置いて俺も同様にその家の前まで走った。

「鍵か……」

さすがにそう簡単には行かないよね。
壊せばいいけど、あんまり物音は立てたくない。周りには住居があるし、気付かれると面倒になりそうだ。

「仕方ない、使おう」

時間も限られている。

結局、俺は殲眼グラム・イストラを使うことにした。

意志を込めて殲眼を発動させ、鍵穴部分を目視し――

「砕ける」

小さな声で呟く。害意に集中しやすいように口に出して、鍵穴に意志をぶつけた。

パキツ、と小さな音を立てて、鍵穴部分が真つ二つに割れる。さして大きな音ではなかったから周辺の住人に気付かれることもないだろう。

ほんの少し眼が熱くなるが、まだ余裕はある。どれくらい連続して使えば『血の涙』がでるかも自分で知っていたから、確信があった。

「後のことを考えると多用はできないか……」

争い事になれば剣術も魔術もある。だが、やはり殲眼が一番優秀であることに変わりはない。どういう事態になるか見当もつかないから、俺は極力殲眼を使わないよう心がけることにした。

家の扉を開けると、中には何もなく、ただ床だけが広がっていた。よく見れば床の一部に奇妙な線が入っている。

――解りやすいな……

少し警戒心を強めて、その線に添って床を引っぺがした。床の下にあったのは真つ暗な通路だった。王城への抜け道という予想もあながち間違いではなさそうだ。

半ば勢いでここまできたが、ここからはもっと集中して行こう。敵陣に突っ込むようなものなのだから。

俺は意を決して通路の中に身を滑り込ませた。

大当たりらしい。

暗い通路をずっと進んでいくと、天井から微かに光が漏れる場所にたどり着いた。

ほんの少しだけその天井を押し上げて、外に視線を滑らせる。

大樹のような支柱、微かに見えるシャンデリアの光。

狭い部屋のようにだけど、随分と内装は凝ってある。こんな小さな部屋にシャンデリアとか意味ないだろ……

サンクトウス城にもシャンデリアはあったけど、こんな無駄遣いはしていなかった。

一度天井を戻して、周りに気配がないか音で確かめる。

——よし、行けるな。

結構ドキドキしてます。尾行ってそこはかとなく浪漫を感じる。アルフレッドの書斎のサスペンス小説を読んでいたからだろうか。

もう一度天井を押し上げ、周りを目視し、俊敏な動作で通路から抜け出た。

一つだけ扉があって、その横にぴたりと身体を貼り付ける。

恐らく扉の奥は通路だろうけど、情報が欲しい。

と考えていたら、扉の向こうからカツカツ、と床を踏む音が聞こえてきた。

——あれ？ これ向かってきてるよね？

早々に窮地に陥った。

俺は可能な限り音を消して、抜け道の入り口を開けて身体を滑り込ませる。

バレませんように。

「貴様！ 何をしている！」

——ごめんなさい！

……あぶねえ。声に出そうだった。びつくりさせるなよ……

——俺じゃないよね？ ……俺じゃないはず。

部屋の中には誰も入ってきていないし……

「も、申し訳ありません！」

女の声が聞こえた。

俺じゃなかった。杞憂だった。

それにしても意外とよく声が響いて来る。丁度良い、この会話から何か情報を引き出せないか。

「新入りか。こんな所をうるちよろしやがって。それで、どうしたんだ一体」

最初に一喝したのは野太い声だ。男と見て間違いなさそうだ。もう一方は女。どっかで聞いたことがあるような……

「修練場を探しておりました。栄えある王宮騎士団に士官できたので、今一度剣術を鍛えようと——」

「修練場？ 鍛える？ 貴様は何を言っているんだ」

「……と仰られますと？」

「いいか、貴様は剣術など鍛えなくとも良い」

「それは……どういふことですか」

うわあ、この二人全然話かみ合っていないよ。

「ハッハッハ！　なんだ、知らされていなかったのか！」

馬鹿め、高笑いとはこうやるんだ。フハハハ！

……俺、こんな暗い抜け道で一人で何やってるんだろう。

「詳しく教えて頂きたい」

よく解らんが険悪になってきたな。語気も強くなってきた。

そんな事はいいから早く有用な情報よこしてくれよ。

「貴様は騎士ではなく——遠距離遊撃隊の慰安婦として士官が認められたんだよ！」

おおっ……重い。いきなり重い。心の準備が……

「そ……そんな……。私は確かに騎士として士官を……」

「騙されたんだよ、貴様は。騙された方が悪いんだぞ？　第一、騎士だからという理由だけで、まともに動けないような重鎧を着させられるなんておかしいとは思わなかったのか？　すでにその時点からお前は遊ばれていたんだよ。本当に重鎧を着てきた時はあまりの滑稽さに笑いを堪え切れなかったなあ——」

まあ、騙される方にも油断があったのかもしれないが、一つ言わせてくれ。

——騙すほうが悪いに決まってる！

いかん！ アルフレッドのにやけ面が脳裏に浮かんできた！

「……アテム王国の王宮騎士団は高潔だと聞いておりました。それすらも……偽りなのですね」

「対外的には高潔だ。この国は王からして内部に膿を溜め込む性質なんだよ。その上、隠すのが得意ときてる。外面など、ただの一面に過ぎん」

「……」

「文句があるなら言ってみろ。取り計らうかは俺の機嫌次第だけだな。——なんなら慰安婦の演習に俺が付き合ってやろうか？」

「な、何を——！」

おー、稀に見る屑っぷり。修羅場勃発。でもいい加減にここから出たいです。早くしろよ、後ろが詰まってんだよ。

そんなことを思っていたら、不意にガチャリ、と扉が開く音がして、次に俺が潜んでいる場所の丁度真上あたりで衝撃が起きた。

かなりビックリした。

たぶん女が俺の上あたりに押し倒されたんだろう。

——おいやめろ、下に人がいるんだぞ！

「抵抗するのか？ 下手な行動をすればお前はすぐに追放されるぞ？」

「くっ！ 私は——！」

上でドタバタしてる。

どうしようかと悩んでいたら、不意に別の音が俺の耳に入ってきた。

—— あ、今通路の奥の方から人の声が聞こえた。

もしかして俺の死体を確認しに行った別の暗殺者とか？
……。

—— 挟まれました。

やっぱり勢いで来るんじゃないかな……

9話 「意志」

集中しろ。

通路の奥から二人。上に二人。

上の二人は言い争っているから、この場合は上の方が奇襲を掛けやすいか。

既に俺の頭は奇襲する、という事を確定事項として認識していた。隠れる場所もない。可能な限り迅速に、意識を絶ってしまうことが俺にとつての安全に繋がる。ここまで来てしまったからには言い訳もできない。

通路の奥から聞こえる話し声が徐々に大きくなっていく。まだお互いに姿は見えていない。

今の所、彼らが俺に直接的な害を加えたわけじゃないから、命までは絶ちたくない。死を知っているから、というのも言い訳がましいな……

俺は単に人の死を背負いたくないだけかもしれない。

——甘いのだろうか。

暗殺者にえらそうなことを言っておいて——

いや、それは後で考えよう。

今は時間が無い。

俺は一応の保険として殲眼を発現させ、いざという時にいつでも害意を込められるよう、意識を『争う』ことに集中させていく。意を決して天井を押し上げた。

しかし、上の二人はこの抜け穴の丁度真上で争っているらしく、どうにも重くて押しあがらない。

くそっ、仕方ない。音が上がってしまうがこのまま通路内に閉じ

込められるよりはマシだ。

勢いをつけて、天井を思いっきり蹴りあげた。

「な、なんだ!？」

床が外れて盛大な音を奏で、同時に、野太い声が聞こえた。

瞬間、視界に映る光景。

床ごと蹴りあげられて宙を舞う軽鎧の男と、下着姿の女。

シオニーだった。

最近よく下着姿で俺の前に現れますね…… 趣味か何かですか？

冗談は程ほどにしておいて。音が盛大に上がってしまった以上、もたもたしている訳には行かない。

抜け穴から身を乗り出して、床面に足をつけ、丁度その頃に床に尻から落ちた男の方へ猛突する。

尻餅について驚愕の表情と共に俺を見ている姿はそれなりに滑稽だ。

「寝ててくれ」

その男の顎に狙いを定めて、思いっきり蹴りを放った。

「ぐっ……」

程なくして男の瞳がぐるりと上を向き、首が垂れ下がった。うま
く気絶したようだ。

「——サ、サレ!？」

シオニーが先程の男と同じような表情で問いかけてくるが、答えている暇は無い。

次に、抜け穴の真上に陣取り、後ろから来るであろう二人に備える。

案の定、俺を襲った暗殺者と同じような装いの二人が姿を現した。一瞬目が合つて、向こうは咄嗟に身を引こうとする。

俺は二人の頭が引つ込む前に、片手で一人ずつその頭を掴み、穴から引つ張り出した。

まず一人、先程の男と同じように膝を下顎に叩きこむ。

その後、即座にもう一人にも膝を叩きこもうとしたが、あちらも頭を掴まれた状態から反撃してきた。懷から短剣を取りだし、左胸を狙って突き刺そうとしてくる。まだ対処のしようはあった。

抜け穴から出る時に服の中から尻尾を出しておいたのが功を奏したと言えよう。

短剣を突き出すそのいつの手首辺りを咄嗟に尻尾で巻き付け、あらん限りの力を込めた。

結果、短剣による突きは寸での所で止まる。

尻尾も鍛えておいて良かった……握られるのはどんなに鍛えても痛いままだったんだけどね。

「がっ……!!」

そいつにも膝蹴りを叩きこむ。声とも衝撃音ともつかない奇妙な音が鳴って、同じように気絶した。

「——ふう、一段落した」

頭を掴んでいた二人を適当に投げ捨て、つい声を上げてしまう。

「どうしてここに……」

「ここ、アテム王城で間違いないよね？」

「あ、ああ。……君、その眼……確か魔族の……」

シオニーは未だ驚愕の表情のままそんなことを言ってきた。

さつきからずっと殲眼を発現させているから、たぶん俺の赤い眼には六芒星の紋様が浮かび上がっているのだろう。

「勘付いたのなら隠しても仕方ないか。そうだよ、俺、魔族なんだ」

あっけらかんと公開する。たとえ俺が言わなくてもその答えに辿りついていただろうし。

「アテム王国の理念に従って俺を捕まえる？」

どういう答えが返ってくるか確信していながら、少し意地悪な問いを投げ掛ける。

「私は既に……騎士ではない」

——やっぱり。

シオニーは随分と精神的なダメージを受けているようだった。眼からは光が失せているように見えて。

俺には彼女の気持ちは解らない。アテム王国の王宮騎士団に士官できたことがどういう意味なのかも解らない。ただ、彼女が生きる事を諦めようとしているのだけは解った。大袈裟かもしれないが、アルフレッドが時折見せていた表情と似ている。何かを諦めたような、空虚な微笑。自嘲するような笑み。

嬉々として俺にアテム王国の騎士になることを語っていた彼女はもうそこにはいなかった。

「そう。俺にはよく解らないけどさ、無責任ながら一つだけ言っておくよ。——生きていればそのうち良い事もあるんじゃないかな」

綺麗事だろうか。

楽観的であると笑うだろうか。

いずれにせよ、俺はそう思っている。希望なんて大層な言葉は飾らないけど、死ぬよりかはだいぶマシだ。あれはあれで苦しいからね。それこそ空虚しか残らない。自ら動くことすらできなくなるのだから。

……というか、なんで俺はそんなことを彼女に言ったのだろうか。そんな言葉が脳裏を過り、ハツとした。

——俺は自分から繋がりを求めてしまっていた。

矛盾だ。

繋がりを持つ事に恐怖を覚えていながら、なぜ自分からそんなことを言ってしまったのか。繋がりがあるといふ楽しさを知っていたからなのか。

嗚呼……やばい、混乱してきた。

「私にはもう居場所がない……だから——」

やめろ。言うな。引き下がれなくなる。立ち直るな。そのままでいろ。

我ながら勝手だと思う。酷い矛盾だ。身勝手だ。

彼女は思いのほか立ち直るのが早かった。思っていた以上に、強い女だったのかもしれない。

——そして……なかなか傲慢だった。

俺の望みは彼女に届くこともなく、彼女の口は言葉を紡いでいた。

「——私を君の騎士にしてくれ」

何故そうまでして『騎士』にこだわるのか。否、そんなことよりも——

耳を塞ぎたくなった。

この言葉に頷けば、俺は一人ではなくなってしまふ。

——俺にとっては大ごとだった。

魔族の皆が死んだ時の事を思い出す。

俺がその手に持っていた繋がりが、全て消えてしまった時の事を思い出す。

でも、声を掛けてしまったのは俺自身で。

だから、独善的な言葉しか出てこなかった。

「……条件がある」

「……」

「俺より先に死なないでくれ」

シオニーは一度大きく目を見開いて、しかし直ぐにコクリと頷いて見せた。

——これが、俺の選んだ道なのだろうか。

頭では、排他に排他を重ねるつもりだった。全て遠ざけようと考

えていた。

この新しい繋がりでまで消えてしまったら、俺は耐えられるのだろうか。

……。

開き直れ。答えはあとからついてくると、今だけは信じよう。

「じゃあ、早速騎士さんに働いて貰おうかな。俺、どうしてもアテム王に会いたいからどこにいるか教えてくれない？」

音を立ててから、まだ人は駆けつけていない。時間の問題だろうとも思う。

とりあえず、羽織っていたマントを脱いでシオニーに被せた。先程まで着ていたと思われる簡素な衣装はびりびりに破けていて、下着姿で走り回るのも気が引けるだろうと思ってマントを貸した。

「ありがとう。アテム王は王城の最上階にいると思う。私も今日の朝、一度顔を合わせたただけだが——騎士になるための儀式に最上階を使ったから。謁見の間も最上階にあるし、王室もたぶん階上だろう」

成る程。早々に役に立ってくれた。

それにしても最上階か。このほかでかい城の天辺まで走らなきゃならないのか。意表をつければ案外そのままいけるかもしれない。さっきの男の力量的にも、アテム王国の騎士はそこまで武力は高くないと予想できる。その一面が、他の騎士にも当てはまる画一的なものだと願うばかりだが…… 逆に、それはそれで——この程度

の武力にどうしてアルフレッドたちが屈したのかと理解に苦しむことになる。

アテム王に聞けば解ることだろうか。

そんなことを考えていると、シオニーが気絶してノびている軽鎧の男の腰から剣を拝借して、すらりと抜剣していた。

「いける？」

「剣さえあれば、主^{あるじ}ほどでは無いかもしれないが、それなりに腕に自信はある」

「サレでいいよ」

「なら私もシオニーでいい」

主と騎士。到底そうは思えない会話だ。シオニーって結構頑固なのかな。まあ、この方が話しやすいからそれでいいと思う。

「よし、最上階まで一気に駆け抜けよう」

「解った」

俺が先に歩を進めて、部屋の扉に手を掛ける。

ほんの少し扉を開けて、隙間から廊下に視線を滑らせた。

——いけるな。

一度シオニーの方を振り向いて、頷く。シオニーもそれに対して頷きで返してくれた。

「階段は王城の外周に沿って螺旋を描いている。だから、最初の階段さえ昇ってしまえばあとは楽だと思うよ」

「了解。それで、最初の階段はどっち？」

通路の右か左か。

「右」

「合点。んじゃ、駆けあがって見ようか」

扉をそーっと開ける。

廊下に半身を乗り出してみるが、右にも左にも人がいない。場所が場所だからかな。これだけ城が大きければ人気の少ない場所もあるだろう。

一度そこで考えを切って、俺は足に力を込めた。
ここからは走り抜けるだけだ。

階段までは意外にもすんなり到着できた。だが、階段の上の方からは人の話し声がある。ここからが正念場か。

ここに到着するまでの間に、脱出の方法に関しては色々考えていた。

手っ取り早いのは王城に魔術で横穴開けて強硬脱出。どういう状況になるか解らないからなんとも言えないけど、一応手段の一つとして算段は見積もっておこう。

「ここからだ。大丈夫？ シオニー」

「問題ないよ、サレ。それでも鍛えている方だから」

鍛えているって割には細いけど。確かに、見れば息一つ荒げていない。問題はなさそうだ。

「やばくなったら逃げる、降参する、無茶しない。とにかく死ぬな」

「とても騎士に掛ける言葉とは思えないな。いずれ話し合う必要がありそうだ――」

彼女は少し笑って言った。

「理解したなら、行こう」

「ついていくよ」

俺もシオニーも一旦大きく深呼吸をして、階段を駆け上がり始めた。

案の定、というか、運が良い、というか。

階段を一つ駆けあがるとさっきまでの階とは違って人がかなりいた。王城勤務者。文官から騎士と見られる武官まで、様々だ。

だが、階段を上がるとすぐ目の前にさらに上へ続く階段が見えた。シオニーの言っていた事は正しかったらしい。

結果、皆が皆俺達の姿を見て悲鳴を上げたり茫然としたり、騎士に至っては武器に手を掛け始めたが、こちらはそれに目もくれず次の階段へと走り抜けた為、ほとんど素通りすることができた。速度を緩めなければこのまま最上階までいけそうだ。

ふと時々後ろを振り向いてシオニーがいるかどうか確認する。

その度に彼女は俺の後ろにぴったりついて、その美貌に頼もしげな微笑を宿らせて、俺に返してくれた。

これなら最上階まで持ちそうだ。

こんなに城をでかくする意味があったのかどうか、アテム王に問

い正してやりたい。

いくら階段を上つても最上階に辿りつかないなあ。

最初は後ろから追っかけて来た王宮騎士たちもいつの間にか見えなくなっている。

「そういえば、シオニーって魔人族が怖くないの？」

余裕がでてきたので、唐突に聞いてみた。

「その能力が恐ろしいということは話に聞いていたけど、私は直接害意を向けられたことがないから何とも言えないな。私の方からも聞きたい。数多くの魔人族を殺した純人族が憎くはないのか？」

考えを巡らせてみた。

「なんだろうな……俺は昔のことは解らないから、別に純人族が多くの魔人族を奪ったってということにはそこまで敏感じゃない」

けど。

俺の数少ない家族を奪った、ということは勿論簡単に許せるものでもない。あるいは、当事者に会えば明確な憎しみを抱くかもしれない。今はまだ現実感が持てないだけで――

それでも、それ以上に――

「俺の恩人が言ってたんだよ。純人族の皆が皆、魔人族を憎んでいるわけじゃないって」

「……それは確かに。和平を結んでいた頃は魔人族に好意的な純人族もいたというからね」

「シオニーもそういう類なんじゃないの？」

「そうだな……種族が違うから全部敵だと、そういう大きな括り

で考えたことはない。個人である私から見れば、どうにも規模が大きすぎる」

「そう、それ。俺も同じだよ。『種』に注視するあまり、『人』で
ある前提を見ないからきりがなくなる」

どうにも屁理屈っぽいけど。結局の所、自分が納得できる答えの一つでもあった。

「そうだね。史実が過去の凄惨な戦を事実として記してしまっているけど、私達は現在に生きているのであって——ん？ なんだか屁理屈っぽくなったな。まあ、過程を無視した結果論は説得力に欠けるかもしれないけれど——」

同じ事を考えていたらしい。

種全体で見れば、俺達の考え方は独善的なかもしれない。

ちょっとした会話をこなしていると、遂に上へ向かう階段が見えなくなった。

つまり——

——最上階だ。

俺は気を引き締めて最上階の大広間に視線を向けた。

大きな扉と、小さな扉が二つ。

「たぶん、左側の小さな扉が王室だと思う。儀式の間は右隣の小さな扉で行った。真中の大きな扉は謁見の間かな」

後ろから追ってくる騎士たちの姿はないが、わざわざここで止まる必要もない。

俺はシオニーが指し示した左側の扉の前へ、歩を進めた。

一度大きく息を吸い、ため息交じりに吐き出した。

——ここに居ろよ。別の場所に居られると探すのが面倒だ。

シオニーの推論を信じるのが手っ取り早かったから、それを選んだ。他にも方法はあったかもしれないが……

——彼女の推論が望んだ結末を齎してくれることを祈りつつ。

俺は扉をけ破った。

10話 「対峙」

——居た。

執務机に向かって書類に目を通している初老の男だった。くたびれた顔。目の下のくまは濃く、眉間に寄っている皺は深い。くすんだ灰色の長髪は乱雑に肩に掛かっていて、その眼は赤く濁っていた。まるで、魔族の容姿を全体的に濁らせたような色合いだった。そのことに妙な違和感を覚えつつ、こちらを見上げた男に向かって言葉を紡いだ。

「問おう。お前がアテム現王か」

役者ぶってみるものの、慣れていないからか些か迫力に欠けるかな。そんな下らない考えが思考の端で蠢いた。

初老の男は俺とシオニーが扉を蹴破って部屋に入ってきてても、大きな反応を見せなかった。俺の言葉に対しては、一層その無表情さが顕著だった。もうちょっと驚けよ。頑張ってここまで来た甲斐がないじゃないか。

「いかにも。私がアテム現王《ケルヴィン・エルンスト・アテム四世》だ。最後の魔族よ」

しわがれた声が耳に入る。

濁った赤眼に鋭い閃きはなく、ただ静かな水面のように悠然と光が佇んでいるように見えた。

俺が予想していた人物像とかけ離れている。もっと荒々しい男だと思っていたんだけどなあ。

少なくとも、魔人族と争ってきた国の王とは思えない。

「俺がここに来るのがお見通しと言わんばかりの平静ぶりだな、アテム王」

「けしかけた暗殺者がしくじったことは耳に入れている」

俺が尾行していた暗殺者が報告したのか。

「なぜしくじったと知っているんだ？」

「死を確認しなかったと聞いた」

はたしてそれだけで俺が生きているという予想に辿りつくのだろうか。飛躍も甚だしい。

アテム王のなんでも見透かしたような口ぶりに苛立ちを覚えていた。この言葉も、結果論としてあたかも知っていたかのような口ぶりで創作しているだけだ。なんかこう、手柄を奪われたような感じがする。『全部俺のおかげ』みたいな感じの顔。

先程こそ、一度俺に視線を向けたが、今ではその視線は手元の書類に向けられている。

——早速ちよつとぶつ飛ばしたくなった。

その余裕が癪に障る。

「聞きたいことが山ほどある。先日魔人族を皆殺しにしたのはお前だな？」

正確には、お前の命令だな、と。

「そうだ。なんとも呆気ない幕切れだった」

ほんの少しだが、アテム王の語気に感情が乗ってきている気がする。そうだ、もっと引き出せ。無表情を気取られるとそれを崩してやりたくなる。

「それがお前達アテム王族の悲願だろ？　まるで虚しいと言わんばかりの顔だな」

「虚しい。確かに、虚しいな。王族の悲願というのも正しい。だが、最後の魔人族よ、貴様にはこの虚しさがわかるまい」

——解ってたまるか。

いつの間にか、アテム王ケルヴィンは俺の顔に視線を向けていた。

「千年だぞ。何代も前から、ただ魔人族を駆逐するために計画を果たしてきた。その結果がこの幕切れだ。……無駄だった。全て、無駄だった」

ケルヴィンは一度言葉を切り——

「貴様の存在は無駄だった」

——真正面から存在を否定されたのは初めてです。

正直憤りよりも驚きの方が大きかった。

ケルヴィンは俺が問わなくても、勝手に話を続けている。

「初代イルドゥーエ皇帝の軀を得てから、あらゆる手を尽くしてきた。訳も解らぬ魔術を行使し、そのために一体何人の民が命を捧げてきたと思う。百万だ。その対価がこれか。虚しいという言葉です

ら、語りつくせぬ」

「それを噓^{けしか}けたのはお前達だろう!!」

その責任があたかも俺に帰属しているような口ぶり。責任転嫁も甚だしいだろ。

「正に。それは否定しない」

淡泊な言葉が返ってくる。

「貴様が『出来上がった』時には、すでに魔人族は百人程。どうにでも出来た」

なら――

「何故すぐに殺さなかった？ 百人を皆殺しにして、俺の器と魂を壊せば、全てが終わったろうに」

「それができと思うか？ 個人である私に、莫大な時間と先祖の命を捧げた計画を消せと。貴様ならそれが出来るのか？ ……重過ぎる」

私は出来なかった、と懺悔するかのような言葉が聞こえる。

「矛盾だ。あの計画はアテム王国の理念の重荷となった。千年前に戻り、計画創始者である初代アテム王を殺してしまいたかった。その計画は無意味だったと、罵倒してやりたかった。ゆえに、貴様が覚醒し、歴代イルドゥーエ皇帝の意志の下、イルドゥーエ領内まで逃げた時に私は判断を保留した。貴様の存在は重過ぎる」

アルフレッドの推論は正しかった。それにしても――

——情けない奴だと思う。

ケルヴィンの気弱な発言に毒気が抜かれてしまった。

「私が保留と決断を繰り返したがゆえに、貴様はここにいる。監視をつけ、貴様がどういう行動を取るか見ていた。貴様は魔人族に育てられ、ついに私の下に辿りついた。だからなんだと言うのだ。……もういい。貴様はいてもいなくても、どちらでもいい。だが、貴様がアテム王国にいることだけは避けなければならない。そう思い、刺客を差し向けた」

「身勝手にも程があるだろ、おい……」

うまく纏められないが、少なくともアテム王国がその身に溜めこんできた狂気の集大成を、ケルヴィンと俺自身に見た。存在が定まらない。目的も不明確で、ゆらゆらと漂う陽炎のようだ。

「史実は変わらないだろう。過去に純人族と魔人族が争った。一時は和平を結んだが、純人族が裏切った。魔人族は激滅し、形だけの皇国に籠った。それから先は、史実には記されない。アテム王国が魔人族を作ったことも、先日、アテム王国の襲撃に晒されて純正の魔人族が滅びたことも。貴様が存在していたことも——全ては暗部だ。こんな悲劇は記されなくて良い。史実といっても……所詮は一地方の古びたモノだがな。……何故貴様等はよりにもよってこのアテム王国の隣に根差していたのだ——他の種族、他の国家、他の組織、争いの火種など何処にでもある。それらに対処するだけで手いっぱいと言うのに……その上、魔人族だ」

なぜお前にそんなことを咎められねばならないんだ。

お前の言葉は八つ当たりだ。あらゆる決断の正否を、その決断の

原因を、他者に押しつけているだけだ。

——何なんだよ。

「お前達は何なんだよ——なぜそうまでして……魔人族を忌避したんだ」

アテム王は俺の問いを受けて、初めて目を丸めた。驚きの表情を見せた。しかしすぐに先程までと同じ虚ろな表情に戻る。

「……恐ろしかったからだ。だから遠ざけた」

同じだった。

それは、俺が繋がりを恐れて人との繋がりを避けた事と根本的に同じだった。排他的な考え方。

「アテム王国の理念は全てそれに裏打ちされている。純人至高主義も、結局の所、純人族が身を守るために作った幻想だ。昔は違ったかもしれないが、今ではそれすらも民の意識の奥深くに押し込められている。形だけだ。なんともなく、国の決まりだからと他種族を排他しているだけであって、民が強く他種族を排他しているわけではない」

何もかも期待外れで。どこかズレていて。アテム王国の全体像が頭の中で歪んで見えた。

「『種』であることを無視し、『人』を見ようとは思わなかったのか——」

「戯言だな。その言葉一つで世界を変えられる程、世界は狭くない。結局、どんなに取り繕っても貴様等のその眼は恐怖であり続ける。」

あるいは、国を守ろうとする王族だからこそ、その眼に惑わされたのかもしれない。——そうだ、その眼だ」

王室の中にぽつんと置かれた姿鏡に視線を向ければ、自分の眼に六芒星の象形が浮かび上がっているのが見える。

丁度その頃、後ろの方が騒がしくなってきた、シオニーが焦燥を含んだ上ずった声をあげていた。

「サレ！ 騎士たちが追いついて来るぞ！」

くそつ、もう少し時間が欲しい。

「父上、そろそろよろしいでしょうか」

不意に、別の声を俺の耳が捉えていた。ケルヴィンが座る執務机の方に向き直る。ケルヴィンの背後にある巨大な窓と、その両側に纏められている巨大なカーテン。そのカーテンの裏側から、ケルヴィンと同じような容姿の若い男が姿を現した。

——男？

パッと見る限り、その服装は男物の貴族装束に見えるけど、どうにも顔を見れば異様に女っぽい。

——いや女だろあれ。

なんで男装してんの？ シオニーと同じタイプの人？ 流行ってるの？

中性的と言うほどでもない。むしろ可愛い顔をしている。くすんだ灰色の巻き毛に、桃色の瞳。ケルヴィンと同じように魔

人族に近い血色の悪さが見られる青白い肌。

だが、ケルヴィンと違ってその眼には強い意志の光が見て取れる。

『父上』とケルヴィンを称することから、アテム王国の王子であろうか。いや、女だし王女？

「——サレというのか」

彼女は俺を真っ直ぐに見て、そう問い掛けを投げて来る。

「僕は『ヴィンセント・クラウ・アテム』。アテム王国の第一王子だ」

優雅な身振り手振りを加えて、名を語るヴィンセント。
いやいやいや、女でしょ？

「王女じゃないの？」

「違う！ 王子だ！」

怒鳴られた。まあいいや、王子ってことにしておこう。

「くっ……。——そして、魔人族を殺した張本人でもある。魔人族の眼を全て抉り取ったのも僕だ。そう、僕が殺した」

ヴィンセントの言葉が何度も頭の中で鳴り響いた。

殺した。抉り取った。

——そうか、お前がアルフレッド達を……

俺が半ば茫然としている中、それでもヴィンセントは言葉を紡ぐのをやめなかった。

「勿論、それなりの代償は払ったけど。魔族百人に対して、僕は王宮騎士団二万人を捨てた」

二万人か。確かに、そこまでつぎ込まれるといくら魔族でも敵わない。それにしても、よくもまあそんな数を俺が少し城から離れた時に動かせたな。随分と綿密な強襲作戦でも取ったのだろうか。

……いや、今更そんなことはどうでもいい。

「……お前が率いたのか？」

「そうだよ。僕は魔族を殺すためにこれまで生きて来たから」

『ある時から、アテム王国は計画とは別に魔族を殺すための純人を作り始めた』。

アルフレッドの手記に記してあった文字が再び浮かび上がる。

「アテム王族はそうやって同じ輪廻を巡ってきたんだ。父ケルヴィンも同様に。アテム王子が歴代皇帝を殺し、その後、王となり子 became した後、今度はその子が次の皇帝を殺し……そうやってお前の魂を弄び続けた」

記憶は殆ど残っていないが、ヴィンセントの言葉が正しいならば、俺の死亡記録の中にはケルヴィンの若かりし頃の姿が映っているはずだ。

——ああ、成る程、そういう仕組みなのか。

魔族殺しに特化した純人族とは、すなわち『アテム王族そのもの』なのか。

「ヴィンセント、お前は魔人族を殺す事に疑問を抱いたか？」

それが聞きたかった。

「いや？　それが僕達の役目で、役割だから」

——それだけか。

意識しないよう心がけていたけど、そう鼻に掛かる笑みと声で言われると、さすがに憤りが生まれてくる。

「役割に依存するのは楽だろうな」

「でも、こうすれば民を守る。民に対する脅威の素を排除できる」
「それは民を言い訳にしているだけだ」

ケルヴィンよりも性質たちが悪い。そんな印象を俺はヴィンセントに
対して得た。

「人は誰かの為に生きていた方が楽になれる。ただひたすらに自分の為に生きていられる程、強くはない」

ケルヴィンが横からそんな言葉を発した。

少し前の俺なら、否定していたに違いない。だが、今の俺では声高に『違う』と言えなかった。ついさっき、シオニーという明確な繋がりを持ってしまったから。ここで違うと言っても言い訳になる。

「そうだな。そうかもしれない。でも、俺はお前達とは違う道を選ぶ」

排他に排他を重ね、アテム王族はこうなった。その他の要素が絡

んだ為でもあるが、根本はそこだと思う。そして俺も、そうなるうとしていた。アテム王族は民を糧に、俺は家族との思い出を糧に、その他を排他しようとしていた。

「それは無理だよ。お前はここで死ぬ。そして、全て無かったことになる。話は変わるけど、僕らの容姿はお前たちに似ているだろう？ これも魔人族を滅ぼすために魔人族に近づこうとした代償だ。紛い物だよ。お前もそうだ。紛い物。だから種に誇りを持てない」

我ながら、随分と都合が良いと思う。それでも――

――今は違うと断言して見せる。

アテム王族の前では、なんとしてでも。

臆げながら、微かに俺の前に新たな道が開いているように思えた。だから否定する。違う、と。

「お前はさ、人の死を背負いたくないだけじゃないの？ よく考えてみなよ。僕達よりお前の方がよっぽど性質が悪いと思うんだけどね」

……そうだ。背負うのは苦手だ。

「だから好き勝手できる。お前の価値観は種族の誇りを淘汰した、あるいは最初から持っていなかったからこそ生まれる価値観だ。種ではなく人を見る？ それはただの逃げ道だよ。種が違うから価値観も違う。だから、時に争う。譲れないから」

……そ、そうかもしれない。

「なのに、お前は自分の価値観と僕達の価値観が交わることはない
と知っていながら——僕達がお前の種族の仇だと解っていながら、
手を下せない」

……そうです。現状その通りです。

「ほら、その眼で僕を見て『死ね』と願えば、僕は死ぬよ。——
でもお前にはそれができない。口では自分の考えを紡げるのに、そ
の為の犠牲を背負いたくないから、お前は僕を殺せない。お前の行
動がそれを如実に表している。さつきから機会はずっと眼の前で佇
んでいるのに、すぐに仇を討とうとしないのはそのためだ」

……その通りです。もうやめてください。

「お前は考えは独りよがりなんだよ。自分のことしか考えてない」
「解ってるよっ！ 正論ばかり吐きやがって！ 正論製造王女め
！」

——全然否定出来なかったです。

「だから僕は女じゃない！——まあ、僕達の考えもお前と似た
りよったりだ。でも、僕達には覚悟がある。千年分の覚悟が。僕達
は僕達のために他を切り捨てる。だから、お前を殺して——『お
終い』だ。ここが、巡り廻った輪廻の終着点。さあ、終幕にしよう」

その言葉の後に、まるで機を見計らったように王室へ騎士たちが
入り込んできた。

シオニーが緊張した顔で剣を構えている。

——もう語る時間はなさそうだ。

ヴィンセントが腰の細剣を抜き放って、切っ先を天に向けるように構えた。

対する俺は、口を嚙み、左腰の宝剣に手を掛ける。
グラム・イストーラ
殲眼の紋様が浮かび上がる眼を一度意識的に瞬かせ――

ある一つの決断を心の中で下した。

11話 「決意」

—— 決めた。

アルフレッド、リリアン、皆、ごめんね。

「俺、やっぱり仇は取れないや」

まあ取らなくて良いとも言われていたけど。それでも一応、謝っておこう。

一度抜き放った宝剣を俺は鞘に収めた。

「……何だって？」

「危うくお前達に寄せられる所だった。大人しく聞いてりやなんだよ。俺のことなんでも知ってる風に言いやがって。十八年間も俺のことを観察してた？ —— 変態共めっ！」

「なぜ剣を収める！？ 僕はお前の家族の仇なんだぞ！」

「うるさい！」

お前はホントそればかりだな。

「なんで俺がお前等の死まで背負わなきゃならないんだよ」

—— 潰れる。

ただでさえシオニーを受け入れてしまった。その上お前等を殺して背負いなさい？ そんな処理能力俺にはない。気付いた。俺はそんな器用じゃない！

「そりやお前等のこと大っ嫌いだけどさ！」

ただでさえ魔人族百人分背負ってるんだ。でもそれは俺が自ら背負ったもので。アルフレッド達の骸を壊したのは、俺が考える事をやめて、目の前の出来事を認めようとしなかったせいだと自分なりに理解している。だから自分の責任は自分で背負う。

でもお前たちは駄目だ。なんでお前達の死まで背負わなきゃならない。納得できない。邪魔なんだよ。纏わりつくなよ、ベタつくんだよ。

今の俺は受け入れるだけで精いっぱいなんだよ。

「俺の背中を使おうたってそうはさせない」

「僕と戦え！ でないと僕の実存意義が——！」

「そんなん知るかよ…… 新しい目的くらい自分で探せ！」

ヴィンセントが泣きそうな顔でこっちを見てくる。

「——だめだ、僕はお前を殺す。魔人族が全ていなくなっ
僕は初めて楽になれる」

そこまで言うなら、やってみる。

「それで、貴様はどうするんだ？」

ケルヴィンが横から口を挟んできた。

「——アテム王国から出て行く。勝手に生みだして、満足する
ために勝手に殺す？ ずっと巻き込まれたままでいられるかっ！」

かなりぶつちやけてるのは自分でも解ってる。

「私達と関わるのをやめる、と」

「そうだ。お前達がどうこうしたいのなら、勝手にすればいい」

「……ならば、お前も勝手にするが良い。私達もお前が脅威とならないのであれば、手は出さん。だが、もしアテム王国の邪魔になるような行動をすればその時は再びお前を消しに行こう」

ヴィンセントと比べて、ケルヴィンは意外と明確だった。

結局の所、ケルヴィンはアテム王国が無事ならばそれでいいらしい。

「もう——疲れた。アテム王国の目的は達成されたものとみなす。だが、『魔族は生まれなかった』。アテム王国に従順で、忠実な魔族は生まれなかった。そいつが生まれる前に、アテム王国が独自の戦力で魔族を滅ぼした。だからそいつの存在は無駄になり、計画は中途段階で破棄された。『計画は消えた』。あるいは、『最初からそんなものは無かった』。もしかすれば、滅ぼしたと思われる魔族の中に一人だけ生き残りがいたかもしれぬ。だが私たちがそれを知る由はない。その魔族がどこへ向かったかも、私達は『知らぬ』。興味もない」

ケルヴィンは気だるげな口ぶりで、誰に言うでもなく、そう紡いだ。

「父上！」

ヴィンセントが抗議の声を上げている。

「奴一人を消すのに、また騎士達が犠牲になる。奴が私たちに関わらないというのなら、捨て置いても構わん」

「しかしッ！」

「ならばヴィンスよ、どうしても奴を生かしておけないというのな

ら、お前が一人でやればいい。先日のイルドゥー工襲撃で二万もの騎士を失った。他の戦のためにも、これ以上無駄に戦力を浪費する訳にはいくまい」

「……解りました、僕一人でどうにかします」

ヴィンセントが細剣の切っ先を俺に向けて構えた。

「あえて言うておこう、ヴィンセント。俺の逃げ足は速いぞ」

アルフレッド率いる魔人族百人対俺の鬼ごっこで一日中逃げ切った男だからな。勿論百人が鬼で。

でも、逃げる前に追いかけても無駄だということを教えてやらねばならない。捕まるつもりは毛頭ないが、ずっと追いかけるのも厄介だから。

「ならこの場で——！」

ヴィンセントがレイピアを構えて走ってくる。

俺は宝剣を抜かず、素手でそれに立ち向かった。

「ついでに！ お前は失念しているかもしれないが、俺は魔人族だ」

高々と宣言する。

一対一の心意気は買う。だけど、俺も決意したからには相応の覚悟で挑む。ヴィンセントを殺すつもりはないが、それなりに痛い目を見せてやらねばこいつは止まりそうにない。

まず一手。

レイピアを素手で受け止める。掌に突き刺さった。ヴィンセントの顔が愉悦に歪む。レイピアはなお推進力を失わずに俺の胸元に吸

い込まれていくが、俺はレイピアに刺された左手に力を込めて、無理やり軌道を変えた。平然とした顔を心掛けてるけど、実は超痛い。心を折るには上げて落とした方がいいかと思っただけで喰らった。

即座に、体勢を崩したヴィンセントの手首を右手の手刀で打ちつけた。

「痛っ——」

可愛らしい声を出せるじゃないか。計画の中の王子であろうとするあまり、自分から性別を偽ったのかもしれない。全然偽れてないけど。

ヴィンセントが痛がってレイピアを地面に落とした。俺は即座にそのレイピアを奪い取って、左掌から引き抜き、

「ふんっ！」

膝で刀身を真つ二つにした。これぐらい朝飯前よ。

ホントは半月板パリーンした記憶が蘇って冷や汗流してたけど。我慢だ我慢。

「ほら！ 次だ次！」

次を促す。

「くっ！」

ヴィンセントが一步大きく退き、悔しそうな面で見えて来た。

そして——

「燃え尽きる！」

すると、ヴィンセントの手の中に小さな光が灯った。その光が数瞬して大きな音を立てて燃え始める。燃え上がる真つ赤な炎。

魔術だ。

ヴィンセントがその炎球を俺に投げつけて来る。

「小賢しい！」

一喝して、俺も魔術を発動させた。意志とイメージ。練り込み練り込み、確定させる。天を仰ぐように両手を広げて——現世させる。

「く、黒い炎——」

俺が生み出したのは黒い炎の塊。ヴィンセントが投げて来た炎の玉の五倍程の大きさで、音もまた凄まじい。——というかうるさい。やり過ぎた。

俺は両手に一つずつ灯った黒い爆炎の塊を、ヴィンセントの炎の玉を巻き込むように斜め上方へ投擲した。

「っ——吹っ飛べええええええ！」

「ひっ！」

大丈夫、当たらないから。

俺の黒炎球はヴィンセントの赤い炎球を掻き消し、そのまま王室の窓ガラスをぶち割って、破片を全て蒸発させながら夜空の彼方へ飛んでいった。

王室の窓側の上半分が全部吹っ飛んだ。

その様子を後ろから見ていたのか、シオニーが足止めしていた騎士たちが動きを止めていた。驚愕の表情を浮かべて、空の彼方に向かって未だに飛び続けている黒炎球を眺めていた。

——そろそろ潮時か。

「シオニー！」

呼ぶ。

見ればヴィンセントは頭を抱えてその場に蹲っている。ある程度力の差は見せられたか。これで俺を追おうなんて気にはならないだろう。たぶん。むしろそうであれ。

「すごいな……サレ。魔術まで使えるのか……まさかここまでとは

——」

「そういうのは後にしよう。今はここから逃げたい」

「解った。どうすればいい？」

言う前に、俺はシオニーを片手で抱き上げた。ちよつと失礼しますよー。

「えっ、ちよつ、サレ!？」

俺はシオニーを抱きかかえたまま吹き飛んだ王室の窓辺まで歩いて行く。

途中、ヴィンセントの横を通った時に『もう追って来るなよ、正論王女様』とだけ言っておいた。皮肉をいう権利くらいはあるはずだ。

その後、開けた窓の淵に足を掛けた。

「何をする気だ！」

お、ヴィンセントが立ち上がった。俺の皮肉に奮起したのだろうか。

でももう遅い。

「何をする気だ！ サレ！」

シオニーが同じことを訊ねて来る。まあ、ここまでくれば大方予想できるよね。

驚愕の表情で何かを訴えかけてくるシオニーに満面の笑みを見せ
て――

「飛び下りるぞー！」

間延びした声を返した。

大きく息を吸って――

――よし。

俺は窓の淵を思いっきり蹴って、暗い夜空へ――跳躍した。

「う、うわあああああああああッ！！」

身体が自由落下していく。心地良い浮遊感だ。シオニーの絶叫が耳元で物凄く響いている。俺の身体をがっちりと両手で掴み、下を見まいと眼を瞑っているのはなかなか可愛らしい。こういう一面もあるんだ、と新鮮な気持ちになった。高所恐怖症なのかな？ 聞

いておけば良かったかな……でもまあ飛び下りちゃったから仕方ないよね。……うん、ごめん。

身体を反転させて、天空を振り向けば、王室の窓から頭を出してこちらを見ているヴィンセントが小さく見えた。

「ホントにもう追って来るなよ！ 俺のことは忘れる！」

念を押す様に言っておいた。結構しつこそうだったからな。そしてすぐさま身体を地面へ向ける。もう振り向かない。徐々に地面が近づいてきて、

「死ぬ！！ 死んでしまっ！！」

シオニーの悲鳴と俺の身体を掴む力が一層大きくなった。

——そろそろかな。

俺は左腰の剣鞘から宝剣を片手で抜き放ち、凄まじい勢いで過ぎ去る王城の壁に突き立てた。

宝剣は壁に突き刺さりながら俺の落下の勢いをその身で受け、ガリガリと壁を抉り取って行く。それが身体に徐々にブレーキをかけてくれて、地面が目の前に来る頃には相当速度が落ちていた。永晶エンシエント・クォーツの丈夫さに感謝したのは言うまでもない。

「早く止めてくれ！ サレ！」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと止まるから」

とりあえずシオニーを安心させるように適当に言っておいた。あとは落下地点をしっかりと目視して、

「弾ける！」

殲眼を発動させる。

王城敷地内の地面は石材で作られていて、落下速度が落ちたとはいえさすがに着地したくはない。着地出来ない事もないが、痛いのは確実。骨が折れてもたぶんすぐ治るけど、痛いもんは痛い。だから、殲眼で着地点の石材を吹き飛ばして、その下にある柔らかい地面を露出させようとした。

結果、目算通りにその下から土が出てきて――

「――あ！ 土でも痛いわ！」

そううまくは行かないよね。いでで。着地は出来たけど結構足に衝撃が――

「止まったのか……？ もう眼を開けていいのか？ 眼を開けたら天国だったとかないよな？」

心配しすぎです。無事に着地してます。

それより俺の足を心配してくれ。自業自得には違いないけど。といいつつ全く眼を開けようとしなないシオニー。今までの物怖じしない強気はどこへ行ったのか。

「んじゃそのままでもいいよ。とりあえず宿まで突っ走るから」

ケルヴィンは俺を追ってこないだろう。口約束みたいなモノだったけど、ケルヴィンから言い出したことだし。

ヴィンセントは正直どうか解らない。だから、出来るだけ早くアテム王国を出たいが、何の準備もなしに外に出る訳にもいくまい。特にシオニーが。

ということでは俺はシオニーを片手に抱き上げたまま王城敷地を抜けだして宿まで走って行くことにした。

——色々あったなあ。

でも、アテム王に会いに行つて良かったとも思う。あと一応ヴィンセントも。

おかげで俺の決意は固まった。

俺は背負えない。今は、受け入れるくらいしか出来ない。

だから、そういう『居場所』を作ろうと思った。

「俺も情けない奴だよ——」

そう呟いて、シオニーを担いだまま夜のソレイユを走り抜けた。

11話 「決意」(後書き)

次話から次章に入ります。再び時間潰しにでも活用してくださいまし。

12話 「道標」

「サレ、私はな、マントを貸してくれた事も、王城から助け出してくれた事も、私を騎士にしてくれたことも感謝している」

「……はい」

「しかし、だ。いきなり王室から飛び下りるとは何事だ。はっきり言おう。私は高い所が苦手だ」

「はい……その度は申し訳ありませんでした」

あの後、宿に戻って亭主を適当にごまかし、なんとか一部屋借りることに成功した。

ところがどっこい、万事解決とか思ってたなら何故か俺はシオニーに土下座させられていました。

「なぜもつと早くに言ってくれなかった？」

「いや、あの、あまり余裕がなかったというか——」

「言い訳は聞いていない」

別段声を荒げるでもなく、ただ淡々と言葉を発する様子は俺にとって恐怖以外のなにものでもありません。

「……調子に乗ってましたすみませんでした」

「次からはちゃんとやってくれ。死ぬかと思った」

必死で俺にしがみついていたもんね。

「何か言ったか？」

「あ、あれ？ 今俺の心の声聞いた？」

なんでバレたんだろう……

「それで、これからどうするんだ？」

シオニーが部屋のベッドに腰かけて問いかけて来た。宿まで走ってくる時に閉まる寸前の露店を見つけて適当に服を見繕ってきたから今は下着姿じゃない。ちなみに下着は白が好きたらしい。

「サレ」

だからなんで心の声読みとるんだよ。

「表情と視線でなんとなく解った」

シオニーって怖い……

「そうだなあ——その前に聞いておきたいことがあるんだけど」
「なんだ？」

「シオニーはこの世界の文化とか、結構知ってる？」

「まあ、一般人並には知っているかと自負しているが。——いきなりどうした？」

成る程、やっぱり世間知らず仲間じゃないって訳か……

あの時間所でもたついてたのは単純に身分証を探してたとか、そういうオチなんだろうなあ……ちよつと悔しい。

「俺あんまりよく知らないから教えてほしいんだけど、組織体ってあるじゃん？ 国とか街とか、騎士団とか。そういう組織体でさ、

俺とシオニーでも組めるようなのってない？ できれば自由が利き
そんな感じの——」

「ふむ…… 些か抽象的だが……」

シオニーが目を伏せて考えている。うまく言葉を選べなかったの
は申し訳ないと思ってる。

「サレの言わんとする組織体で言えば——『ギルド』が最も近い
な」

「ギルド？」

「そうだ。噛み砕いて言えば、同職だったり、同理念を啓蒙してい
たり、そういう者達が集まって作る組織体だ。組織体制は様々だし、
内容もかなり広域に渡っている。一言では表しきれないが——」

ギルド。シオニーの言葉を聞く限り、俺が望んでいる組織体に近
い。

「それ、どうやって作るの？」

「大国へ行けばギルド作成の手続きをしている組合がある」

「ここにはないの？」

「アテム王国は大国だが元々純人至高主義を掲げているからな。わ
ざわざギルドを作らなくても同理念を啓蒙する共同体としてある程
度機能しているから、あまりギルドが存在しないんだ。アテム王宮
騎士団に入れば事足りる場合が多い」

「ふーむ」

「種族人種無差別に暮らしているような大国にこそギルドは多い。
主義主張が多岐に渡るから、近しい者を見つけるのも一苦労。だか
らそういう同種の者を一か所に集めてしまおう、と考えることが多
いと言う。その他に職業斡旋も兼ねて、だったりな」

それこそ居場所と呼ぶのが相応しいかもしれない。シオニーの話
を聞いてそんなことを思った。

「で、ギルド作成の手続きができる大国ってのは？」

「ここから一番近いのは《サイラム王国》だな」

王国って聞く限りあんまり多様な種族人種がいるとは思えないの
は俺だけだろうか。君主がいるなら民が理念に困る事はないと思う
んだが。理念に困る、っていうのも妙な言い方だけど。

「サイラム王国はこの《レリクス大陸》で一、二を争う程の大国だ。
領土的にも人口的にもな。だから色々な種族人種が集まる。それで
いつからかサイラム王国の中に様々なギルドが生まれ始めた。今で
は大規模ギルドのいくつかがギルド連合を設立して治安維持から貿
易支援まで、様々な体制を整えているらしい」

「それ王がいる意味あるの？」

王の出る幕があんまりないと思う。

「勿論。王が定めた王国法と、最高君主という制約があつてこそギ
ルドがその下に位置して様々な力を振るう事が出来る。ギルド間に
問題が起きてても、サイラム王が出てくれば治めることができるしな。
王国法がないと瞬く間に無秩序になるだろう。サイラム王が賢君と
呼ばれる優れた君主であることも幸いしているのかもな。私も多く
は知らないが」

飴と鞭に近いように聞こえた。要はバランスか。サイラム王はえ
らく賢いらしい。

それにしてもギルドの規模にも違いがあるみたいだ。国家に干渉
し得る水準の大規模ギルド。もはや大国を根城にする小国とか、そ

ういう風に見えてくる。

「それと――」

なんて考えているとシオニーが情報を付けくわえた。

「《王剣》と呼ばれる王国騎士団が存在している。サイラム王国独自の軍事力だ。そして明確な抑止力でもある」

さすがに保険はあるらしい。王剣。大規模ギルドに対して抑止力となり得るのなら、相当の軍事力を内包しているのだろう。容易に予想できる。

「強いのか？」

「比類なき程に、と専らの噂だ」

やっぱり。おっかないおっかない。

王剣という組織が気にならないといえばウソだが、当分関係なさそうなので今は他の話を聞いておこう。

「種族も色々いるって本当？」

「ああ。大まかに獣人系、鳥人系、純人系、妖人系、あと少ないが竜人もいると聞いた。その他にも様々な種族がいるだろうけど、私を知るのはこのくらいだな」

さすがに魔人はいないですね。

それにしても随分と多い。つい先日まで俺の頭の中には魔人と純人くらいしかなかったものだから、いきなりそんな多くの種族名を聞いてもどうにも把握しきれない。実際見れば話は別なのだろうが、残念ながらここはまだ純人国家アテム王国で。

「その辺は実際に見た時にまた聞こうかな。大まかな情報は得られたよ。ありがとうシオニー」

サイラム王国か。気になるなあ。

聞けば聞く程世界は広いなあ、と思う。サンクトウス城にそういつた類の蔵書がなかったわけではないけれど、俗世から隔離されているという名目上情報も断片的だったり、異様に古かったりでなかなか有益なものはないかった。

「ちなみにサイラム王国はアテム王国からだと西北に位置している。馬を使えばおよそ二週間と言ったところか。鳥を使えばもっと時間は短縮できるが――」

はて、鳥？

『鳥を使う』という聞き慣れない言葉遣いについて疑問符を浮かべてしまった。

「鳥って――あの空飛んでる小さい鳥？」

「まさか。もっと大きな鳥だよ」

シオニーはさも当たり前のように返してくるけど、その言わんとする所が解らない。

「人運べるの？」

「……もしかして知らないのか？」

だから何をですか。
啞然として見せる。

「本当に世間知らずなんだな……サレ」

「確認するように言わないで！ 情けなくなるから！」

俺はシオニーの呆れたような表情と声色を受けて、咄嗟に両手で顔を覆った。面と向かって呆れられると虚しくなる。

「解った、説明しよう。私が鳥と言ったのは正確には『大鳥』と呼ばれる鳥種のことだ。今現在の主な移動手段として、馬と大鳥がある」

「ふむふむ」

「大鳥は高価だが地形に影響されないし、飛翔速度も中々。だから馬よりも移動手段を短縮できる場合が多いんだ」

「そりゃあ人を乗せて空を飛べたら早いだろうね」

「だから飛べるんだって」

再び呆れた顔で念を押された。シオニーのくせに！

「ただ——」

俺が言葉を発する前にシオニーが続けて言葉を紡いだ。

「大鳥という移動手段が活発化してから、空も安全ではなくなってきたんだ」

「安全じゃない？」

天候とか風とか、そういう自然的な要素は確かに障害になるかもしれないけど——

「『空賊』と呼ばれる賊が蔓延る様になった。大鳥を使うような人はそれなりの資金を持っているからね。賊からすれば上質な獲物っ

てわけ。同じように大鳥を使ったりする賊もいるけど、大半は《鳥人族》で構成されている」

あー、なるほど。

さつき小耳に挟んだ鳥人という言葉が脳裏を過った。

「サイラム王国には空賊ギルドも存在する」

「いやいや、王国法に引つかからないの？」

賊って聞く限り結構あくどいこととしてそうだけど。

「人を殺さなければな。もちろん他にも細かい制約はあるが、一線として設けられているのはそこだ」

「うわぁ……」

結構殺伐としてる。

いや、俺も他人の事をどうこう言えるほど聖人ではないので深くは追求すまい。俺だって俺の為には悪いことしちゃうかもしれないし。というかすでにアテム王城に侵入して暴れるっていう世間一般的には悪い事と目されることをしちゃってるわけで。

「結果的に見れば、サイラム王国を拠点とする空賊が行商や旅人から金を巻き上げてくるとサイラム王国に金が入ってくることと同義になるからな。経済が活性化するという利点がある」

割と独善的である。サイラム王国。

そこはかとなく俺と似た匂いがするけどまさかそれを国家単位で実行し得る国があるとは……

なんというか、俺が思う『居場所』としての機能を体現しているように見えるけれど、どうにも組織の単位が大きすぎて現実感が無

い。比べるにも比べられないと言った所か。実際サイラム王国を見た訳でもないし――

「ふむ……」

とにもかくにも、やはりサイラム王国は気になる。

「というか……もう決めちゃってるんだけどね」

「つまり？」

「サイラム王国に行こう！」

意気揚々と宣言する。

シオニーは俺の言葉に大して驚きもせず、一度頷いてから俺の目を見据えた。

「では、ついていこう、我が主よ」

今更ながら、シオニーが騎士であることを思い出した。

あとでシオニーのことも聞かないとなあ。主と騎士、って割にはお互いのことを知らな過ぎる。

それは明日でいいか。今日は疲れた。明日旅用意をしている時にも聞いてみよう。

「それじゃ、今日はこの辺で。明日早々に準備してアテム王国を出よう」

「解った。私は床で寝るからサレはベッドで寝てくれ」

ちょっと待って下さい。

「いや、あの、それはそれで良心の呵責というものがあるのでシオ

「ニーさんがベッドで寝て下さい」

麗しき乙女を床で寝かせ、自分だけベッドで寝るとか他の人に見られたら全く擁護出来ないレベルの悪評を得ること間違いなし。その前に良心の呵責に耐えられそうにありません。

「私は騎士だぞ。主を床に寝かせるなど——」

「そうすると主が困ってしまうのだよ。主を困らせるべからず！だからお願い！」

なんとしても避けなければならない。

「ふむ……それは確かに本意ではないな。解った、なら私もベッドで寝れば——」

そうそう。それで——うん？

それってつまりあの朝と同じ状況になりますよね。でもまあ床で寝かせるよりはマシか……

シオニーはシオニーで自分の言おうとした事に気付いてみるみる顔を赤らめさせている。

「……ちゃんと服着てね？」

「ああ当たり前だ！」

念を押したつもりだったが最後の一言は余計だったようだ。次から改めよう。

そう思いながらベッドの端っこの方に横になった。しばらくして背中に人の温もりを感じて、

「おやすみ、シオニー」

「あ、ああ、おやすみ、サレ」

しどろもどろな返事を聞きながら目を閉じた。

12話 「道標」(後書き)

前章含め修正を入れつつになります。が新章連載です。

13話 「準備」

刺客が再び窓ガラスを割る事もなく、無事に次の朝になったのは僥倖と言えよう。

俺が目を覚ました時にはすでにシオニーが外出の準備を整えていた。

「シオニー起きるの早いなあ」

「ま、まあな」

あくびを堪えつつシオニーを見ると、眼の下にくまらしきものがあるのに気付いた。

「……」

「な、なんだ」

「シオニー……」

「……」

物凄くつつこみたい。

『え、もしかして寝ていらっやらないんですか？』って言いにくい。

「何も言っな。言わないでくれ」

「……合点了解」

先に釘を刺されたので黙っておこう。次からはちゃんと二人部屋を取ろうと胸に決意した。

宿の亭主の嫌味を聞き流し、ようやくソレイユの街に繰り出した。俺はあまり準備をする必要もないけど、シオニーは旅支度なんてしていないから買い物をせねばなるまい。

ソレイユの街は相変わらず人で賑わっていて、活気がこれでもかと五感に伝わってくる。

「ちなみに聞くけど、持ち物は？」

「……全部アテム王城だ」

「ですよ」

王宮騎士団の宿舎にでもおいてあるのだろう。士官するためにきたのだから当然か。

「そつだなあ、ならまずは旅服を買おう」

昨日適当に買った服は薄いし、機能性に優れているというわけでもない。

「私は剣さえあれば——」

シオニーはそう横から言ってくるけど、

「いやいや、剣より先に服だよ。剣はなくてもなんとかなるけど服はないと。凍え死ぬ可能性すらある」

大袈裟だが一応理にかなっているとは思うんだ。

「しかし主に資金を使わせるのは……」

「ならその分も働きて返せばいいんじゃない？　ちゃんと装備も揃えるから。しっかり護衛してくれると俺も助かるなあ」

売り文句を並べる露店商たちの横を歩きながら、俺は目ぼしいものがないか適当に視線を動かした。

金の蓄えはまだあるし、余程の物でなければある程度装備は整えられるだろう。通貨単位がアルフレッド達に教えてもらった通りなら当分持ちそうではある。というか昨日確かめた。今シオニーが着ている簡素な服は上下合わせて銅貨二十枚。金貨しかなかったから金貨一枚出したら血相かえて首を振られた。『お釣りがありません』って言われた。急ぎだったから用意できるお釣り全部もらっておい

「今の手持ちは金貨十九枚に銀貨三十枚と。これでどのくらい買えるかな」

「大抵の物は買えると思うよ。普通の買い物に金貨は必要ないからな……」

シオニー曰く、単純に銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、金貨百枚で永晶貨一枚になるらしい。永晶貨ってかなり嫌な予感しかしない。

「永晶貨って永晶石が原料だよね……？」

「そうだよ」

やっぱりだよ……　宝剣の値段を頭の中で金貨に換算しようとして途中で諦めた。考えるな、あれは金じゃない、剣だ。そう、剣でしかないと思うんだ！

「サレが腰に佩いている宝剣、だっけ？　それは大国の国宝級の代

物だから絶対に手放さない方がいいよ。永晶石で出来ていると聞いた時は心臓が止まりかけた。小石程の永晶石の塊が一体どれだけの値段で取引されているか知っている？」

「知りません。一生知りません。知ったら宝剣売っちゃうかもしれない……」

国宝級と例えていたけど実際これ国宝です。イルドゥー工王国の国宝でした。アルフレッドがちゃっかりくすねて来た代物ですから。

「それを買う国もかなり限られるけど」

俺が身につけているものは全てアルフレッド達の形見だから、売
る気はない。ないはずだ。いざとなったら…… いやいやいざとな
っても売るのはさすがに。でもやっぱり――

「あ、あの店はどうかな？」

俺が内心で己の欲と戦っているとシオニーが一軒の店を指さして
言った。

見ると騎士風な軽装を表に飾っている服屋のようだ。紋章入りの
チュニツクから翻すのが絵になりそうなケープまである。騎士ルツ
クが庶民に親しまれているとは思わなんだ。まあ確かにある意味選
ばれた者しか着られない衣装だから憧れもあるのかもしれない。ち
よっと堅いイメージだけどシオニーが目を輝かせているからとりあ
えず入って見ようと思い、その店へ足を踏み入れた。

「どれが欲しいか探してみるといいよ」

「す、少し時間をくれ。探してみる」

――楽しそうだなあ。

シオニーが足早に店内に消えて行った。俺は俺で何か目ぼしいものは無いかと適当に商品を見ていくことにした。

しばらくしてシオニーがおずおずとした様子で俺の下に戻ってきた。

「どうしたの？」

「欲しいものはあったのだが……」

シオニーが手に持っている服の値札を見ると、そこには『銀貨十枚』と書かれていた。

成る程、高いから言おうか言うつまいか迷っていたと見える。銀貨十枚か。

「それが気に入ったんならそれでいいよ」

シオニーの荷が軽くなるようにその後店主と話していくらか値切った。一式合わせて銀貨八枚になった。言ってみるもんだ。その後、着替えていくというシオニーを外で待った。

幾許かしてシオニーが店から出て来た。

「ど、どうだ？」

上目遣いで回答を求めて来るシオニー。簡素な綿の服。黒色と茶

褐色で纏められていて、備品に散りばめられた上質の革もなかなか映えている。首元から左肩、左肘にまで掛けて垂れ下がったケープがなんとも格好良い。俺も欲しくなった。触れてみると中々丈夫そうだった。

それにしても意外と似合っている。美人だから何を着ても似合いそうではあるけども。銀の長髪や、同じく色素の薄い銀の瞳が相まって冷たい美貌とでも言おうか。

「うん、似合ってるよ」

「そ、そうか——」

嬉しそうにもじもじしている姿からは到底昨日騎士と剣を交えていた姿は想像できないだろう。俺から見ても相当な使い手だった。何十人の騎士の侵攻を一人で抑えていただけはあつたと言える。

「それにしても、騎士だから鎧でもつけるのかと思ってたよ」

重鎧がっちゃんがっちゃんさせてた姿が今でも脳裏に浮かぶだけに。

「私のスタイルは攻撃を受けないことに重点を置いているから、戦闘に関しては軽装の方を好む。鎧は値が張るし、有っても相手が相手なら意味がない場合もあるからな」

確かに。俺も攻撃を受けない訓練をよくさせられた。試しに鎧着て『斬れるもんなら斬って見ろ！』ってアルフレッドに挑んだら胸部鎧貫通して鎖骨砕かれた。他にも袈裟掛けに鎧ごとぶった斬られそうになったこともある。あれ以来必死で攻撃さけるようになったなあ…… 基本的に男性陣の攻撃が全部致命傷級だったから結果的にそうなったとも言える。昨日ヴィンセントの攻撃をわざと受けたりもしたけど、あれはあれで致命傷になり得ないと判断したからで

あつて。やばそうな攻撃なら条件反射で身体が反応するだろう。防衛本能って素晴らしい。

「なら——あとは剣かな？」

「そうだな。一番時間を掛けるかもしれないが」

「構わないよ。お金もあんまり気にしないで。適当な物を使って死なれると困るからね」

「肝に銘じておく。私の商売道具になるから遠慮は捨てよう」

ようやく納得してくれたらしい。剣だからつてのもあるのかな。死なれると困るつてのは本心だし、納得してくれたようで何よりだ。騎士らしく剣にもこだわりがあるのかもしれない。良い傾向だろう。そうして次は武器を扱っている店を探しにソレイユの街を歩いた。

「まあ俺宝剣使わなくても自分の身はそれなりに守れるから——宝剣を貸してあげてもいいんだけど」

「無茶を言うな。そんな重い剣、私は振り回せないぞ」

「え、重い？」

「……かなりな。永晶石は鉾石の中でも重い方だし、刀身全てが永晶石で出来ている剣なんて常人にはまず振り回せないと思うんだが、実際、剣として研磨してみれば鉾石としての質は最上とも言えるし、切れ味も凄まじいものになるのは解る。永晶石を研磨するなんて普通の鍛冶師には発狂物だと思うけど——永晶貨を削ってるようなものだから」

シオニーに宝剣を持たせたら顔を顰められた。

「少なくとも純人には宝剣を振りまわすなんて無理だ。たとえ鍛え

ていても腕力と均整がとれずに宝の持ち腐れになる可能性が高い。それを軽々振り回すサレの方がおかしいんだよ。その細腕のどこにそんな力があるのか…… 魔人族ってのは皆そうなのか？」

ええ、大体こんなもんです。むしろ俺はアルフレッド達男性陣に比べると比較的腕力無かった方なんだけど。

「大体はそうだね」

「持って生まれた力が違い過ぎるな……」

「まあ、その魔人族も残りは俺だけなんだけど」

シオニーはハッとしたように目を見開いた後、苦虫を噛みつぶしたような顔で、

「———すまない」

「いいよいいよ。もうあんまり気にしてないから。なっちゃったモノは今更悔んだって仕方ない。変遷はあったけど踏ん切りもつけたつもりだし」

だからそんな悲しそうな顔をしないでくれよ。
少し間をおいて話を変えた。

「一応傷に効く薬とか風邪薬とかその他諸々持つてるけど、俺には基本的に必要ないからそこらへんは買わなくてもいいかな」

一応持たせてくれたのだろう。アルフレッド達も俺に薬がほとんど必要ない事を知っていたはずだから。アルフレッドに至っては魔人族の基本以上に俺の身体を鍛えていた張本人だしな…… 鍛えるというかもはや肉体改造だろ……

毒物に対する薬とかもあるけど大概の物は俺には必要なさそうだ。

刺客に盛られた神経毒も致死毒も事実効かなかったし。

「ならその荷物は私に持たせてくれ。そうでもしないと気が済まない」

「合点」

サイラム王国への旅路につく前に荷物を整理する必要があるか。そんなことを考えていると、ようやく武器屋らしき店を見つけた。店に足を踏み入れたあとはさつきと同じようにシオニーが良いと思う物を持つてくるまで適当に時間をつぶした。

シオニーが欲しいと言った剣は実用性の高そうな中型の剣だった。刀身の幅は細剣レイピアとまではいかないが両刃にしては狭いほうだろう。斬撃から刺突まで、攻撃に関しては様々な用途がありそうだ。

「これを二本——」

「ん？ シオニーって二剣使うの？」

「ああ、私の一族は代々そうやって戦いの技術を継承してきたんだ。私の一族は皆二剣使いだよ。無論、私も」

「ふむ」

一族、ね。初めてシオニーの身の上話の一端を聞いた。

「後で詳しく聞かせてくれる？」

「構わないよ。私だけ話さないのも悪いしな。何より私を騎士にしてくれたのだから知っておいて欲しくもある」

「なら、とりあえずこれを買って外に出ようか」

目を輝かせている店主を放っておくのも悪いと思い、俺はその二つを持って店主のもとに向かった。

金貨二枚。

装飾こそ薄い、素材自体は中々上等な物だったらしく結構値が張った。それだけに質の方は申し分ないだろう。

「今まで持った中で一番上質かもしれないな」
「そりゃよかった」

右と左に直剣を一本ずつ佩き、時折その剣鞘を撫でながらシオニ
ーが言った。

「これで大体の準備は整ったかな」
「そうだな。所でサイラム王国まで何で行くんのだ？」

俺個人としては大鳥つてのを使ってみたいんだけど――

「シオニ……鳥に乗れないよね……」
「た、高い所は――」

さすがに二度も怖い思いをさせたくはないので、鳥を使うのはまた今度にしよう。

すまない、と何度も謝ってくるシオニを宥めつつ、次の策に思考を巡らせる。

「んじゃ馬？」
「馬が一番無難だね。私的にも」

「犬とかでもよさそうだけど」

「犬……？」

イルドウーエの森で狩猟をしていた頃お世話になった白い犬つころを思い出した。あれなら移動用にも使えるしいざというとき自分の身も守ってくれそうだけど。でかいし。

適当に話しながら他の備品を買いつつ、移動手段を確保する為に乗り物売りの店に行ってみることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2571z/>

セルフ・ライト・イデオロギー —— 魔人転生記 ——

2012年1月12日15時49分発行